チラ裏シリーズ

test sentinel

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

書きかけで先のない小話たちです。

煮るなり焼くなり忘れるなり。

目次

赤河童と名有りのゴンベエ ―― 1
４５７８６２ ―― 11
鬼とは勝手なものなのです（煽り） ―― 20
＃ ―― 26
披瀝 ―― 29
おかえり　１ ―― 34
おかえり　２ ―― 41
おかえり　４ ―― 47
池塘春草の夢 ―― 51
或る天の片翼の話 ―― 54
或る日の変革の話 ―― 58
或る苦労の話 ―― 62
突発 ―― 66
わた、！しのでき?!。^^^^^ ―― 69
バスケ ―― 72
匿え ―― 78
棘生える ―― 83
絶対的破壊理論、４９４年の禁 ―― 86

赤河童と名有りのゴンベエ

知識を求め人里の鈴奈庵へ。そこで手に取った、紅霧異変について記した書物。

大した理由はない。自分の好きな色が赤だった、というだけの話だ。

だがその本にほんの僅かな違和感を感じた。異変解決者、博麗霊夢、楽園の素敵な巫女。霧雨魔理沙、普通の魔法使い。その横に、紅霧異変の概要。

その解決者の名前と概要の間は、不思議と大きく開いていた。

読みやすくするための空白だ、そう言ってしまえば終わりだろう。けれど疑問が降って湧いたのだ。それなら私は、疑問を解決しなければ気が済まない。そんな妖怪だった。

私は試しに、科学の視点で解析を試みた。そこに何があったのか。何故消されたのか。するとそこには薄くもう一人、異変解決者の名があった。

『冴月　麟　』

それが全部の始まり。

かすれて消えかけていた名前が、何故だろうか、私は酷く気になった。

きっとそれは、親近感だったのかもしれない。

名前を持たずに叩き上げた私と、名前だけを残して消えてしまった彼、ないし彼女。

正反対で、ある意味近かったからこそ、私は惹かれたのだ。今となってはそう思う。

紅霧異変について、私はもっと知りたくなった。直接解決者に話を聞きに行ったりもした。

だが博麗霊夢も霧雨魔理沙も、そんな名は聞いたことが無いという。紅魔館や面々、稗田の御阿礼の子、それどころか偶然出会った八雲紫にも聞いたが、結果は同じ、覚えがないという事だった。

これは歴史の専門家に聞くしかないか？　そう思って白澤の家へ

向かう途中に、私は思いついた。
そうだ、なにも他人に聞く必要はない。
主観交じりの意見より、もっともっと真に迫る方法がある。
当人に聞けばいいのだ。
幻想郷には無数の魔術がある。その中には死んだ者を生き返らせる秘術も存在する。
だが秘術という名は伊達ではなく、習得するには早くて百年はかかる。いくら趣味に走る私でも、そんな非効率なことはしない。そもそも死んだかどうかさえわからないのだ。
話さえ聞ければいい。その名前に込められた記憶さえ、取り出せれば。
私はまず、アリス・マーガトロイドに話をつけた。オートマトンを一体、原寸大の大きさで。代わりに上質な蜘蛛の糸を。
次にパチュリー・ノーレッジの元へ向かい、希望を満たす魔術を見繕ってもらう。代わりに高級な月の石を。
最後に、霧雨魔理沙にその魔法を使わせる。彼女は報酬はいらないと断った。見たことない魔法を使えることが報酬だ、と。
つくづく人間は甘い。私が彼女を呼んだ理由は、たとえ重要情報が出たとしても、私なら人間一人程度、情報統制は容易いから。ただそれだけなのだが。
そうして私の研究室に用意されたのは、名前に込められた記憶を、オートマトンを介し音声として再生させる魔術の起動環境。
しかも、これは死者の魂の冒涜にもならない。これは名前に付随する記憶を音声に変えるだけの術式であり、魂を彼岸から引っ張ってくるものではないからだ。
仮に失敗したとしても、死者蘇生よりかは遥かに楽な術式、らしいので原因はすぐ見つかるはずだろう。
完璧な作戦だ。そう、そのはずだった。
なのに、どうして。
どうして、彼女は、動いているのか――？
目覚めた彼女は、酷く困惑していた。無理もない。

なにせ作ってもらったオートマトンは、動かすことなど想定していない。あくまで形だけなのだ。目や眉や首は動かず、関節は両肩両脚だけの四カ所。

しかしそれでも彼女は動いた。何故なのか、それは全て彼女が教えてくれた。それは、到底信じられるものではない話。

彼女は誰よりも早く、異変を解決しに行ったらしい。闇の妖怪を薙ぎ払い、氷の妖精を下し、門番を破り、魔女を崩し、従者に辛くも勝利して、あの紅魔の主に打ち勝った。

だがまさに主と決着をつけようとした瞬間、彼女は突然墜落したらしい。

身体のすべてが支えを失ったようだったという。飛ぶ力も着地する力も失い、ただ空しく落ちていく彼女の瞳に映った、七色の羽。

そして彼女は、血だまりに横たわった。

目覚めた頃には、何もかもを失っていた。

人々は他人を讃え、異変の解決者には知らぬ名が踊っている。

当の自らは姿を無くし、本にかすれた名前が載るのみ。所謂妖魔本と成り果てていた。

そしてその本としての力も、次第に薄れて行く。

当然だ。人間にしろ妖怪にしろ、誰かに覚えてもらうことが力の源なのだから。本に封じられたことすら忘れられた彼女は、自身を保つだけで精一杯だっただろう。

そうして何十年か経った頃に、私がその記述を見つけ、今に至る。

要は名前そのものが魂の妖怪だから、名前をつけた物に全て宿った、ということらしい。

しかし私は、どこも信じられなかった。妖怪の妄言、いや、ただの騙りかとすら思った。実際、霧雨魔理沙はそう思っていた。

まず、紅霧異変はそれほど昔の話ではない。何十年ではなく、よくて十何年。それどころか、二桁にすら満たないかもしれない。あまり外に出ないので正確にはわからないが。

次に、起きたことがあまりにも不可解だ。

話を信じるなら、霊夢や魔理沙より早く紅魔館に向かい、池を荒ら

し紅魔館を喰らい、七色の羽――おそらくフランドールだろう――に『破壊』された、ということだろう。
それだけのことをしておいて、なぜ全く誰も覚えていないのか。八雲紫あたりは知らないふりをしているかもしれないが、やられた本人であるレミリア達にふりをする理由は無いはずだ。
まるで彼女らが麟を庇っているかのような。
いや、全て『なかったこと』になっているかのような――？
私は研究室を飛び出した。目覚めたばかりの麟の監視を、魔理沙に押し付けて。
あった事実を、なかったことにする。幻想郷でもそんなことができる者は多くない。全てありのまま受け入れるのが幻想郷だからだ。
それでもどうしても受け入れられない者は、八雲が秘密裏に処理する。だがあの八雲に限って、名前が大きな力を持つことを知る賢者に限って、名前だけを残すだなんてことをするだろうか。先に名前を奪うはずだ。
ならば、誰がこんなことをするのか。
いや、理由は後だ。
こんなことができるのは他に誰が居る？
私はドアを開いた。
「おや、お久しぶりですね、みとりさん。寺子屋に何か御用ですか？」
全てを伝えると、上白沢慧音はいつになく焦り始めた。
彼女が？　そんな、歴史は根本から食ったはず。なぜ、今になって？
そんな困惑する彼女を横目に、私はただ興奮していた。
ようやく麟を知っている者を見つけたのだ。しかもこの動揺ぶり、彼女の現状に関わっているに違いない。私は疑問をぶつけた。
どうして、冴月麟を消したのですか？
「……その前に、ひとつ聞かせてくれ。お前はその話を聞いてどうする？　単なる興味で首を突っ込むには、手に余る話だぞ」
私は顎に手をやった。

この疑問に応えるのは容易い。始まりが単なる興味なのだから、今もそうだと答えればいい。河童は水かきの分多く持てるだの、首が回らなくなるわけでないなら大丈夫だの、少しひねくれた回答をしても良い。だけどそのどれもが、私には合わない。

私は幻想少女ではないのだから。ただ、こう言えばいい。

「誰でも自分の未来は知りたくなるものですよ」

……私の意志だ。時間は残されていなかった。壊された体を捨てなければ、それこそ魂もすぐに消滅しただろう。

体を戻すことは、どうしても出来なかった。

その通りだ。あの吸血鬼に破壊されても生きている者などこの世にもあの世にも存在しない。

だから彼女を、名前だけの存在にしたと？

そうさ。名前を破壊することは、あの頃の吸血鬼には叶わなかったようだからな。

なるほど。彼女を消した理由はわかりました。ではもうひとつ。

「ならばどうして、冴月麟のすべての歴史を食べたのですか？」

そう聞くと、慧音は押し黙った。

生かすために体を捨てさせた。他にしようはなかった。それを否定するつもりはない。むしろ破壊の吸血鬼の能力をくらっても生かしたのだから、最上の名医と讃えてもいいほどだ。

だが、その先は？

人に恐れられるものが妖怪。それが恐れられなくなれば。

人に知れ渡るのが強い妖怪。それが、知られることさえなくなったら。

誰かが忘れたから、私達は幻想郷で覚えられている。それが、幻想郷の人間ですら、思い出す事もしなくなったとするなら、それは――

――私は、ここに来たばかりの頃を思い出していた。

何も知らず、何もわからず、ただ灼熱地獄の隅で、ドロドロと溶け出す岩をずっと眺め続ける日々。

行くところはない。そもそも、ここに外があると思っていない。暇

も穀も潰しきり、いっそ自分を潰せはしないか。そう考えながらも、潰す方法なんて考えつかず、また視線を岩に向けた。
そうして眺め眺めて眺めながら眺めやまず眺めやり眺めして眺めくる眺めを眺めに眺め続け――
『あなたは……ほう、なるほど。とりあえず、こちらにいらっしゃい。答えは出せませんが、お茶ぐらいは出しましょう』
熱で揺らめく獄牢に、そんな影が見えた。
そんなことすら、許されない。
紙一枚に己を預け、埃を帽子の代わりにし。
何を知って何をわかっていても、何も出来ないままそこに居続ける。
――上白沢慧音は、それを選ばせたのだ。到底許されはしない。許しはしない。
「麟を生かすなら、すべてを奪う必要はなかった。答えてください、慧音さん。どうして何もかもを消す必要が？」
私は語気を強めた。だがなじるふうに話さないよう、気をつける。まだ理由を聞いていない。もしかしたらやむにやまれぬ事情があるやもしれないのだ。幻想少女でない私は、感情のまま動くわけにはいかない。それが私の、河城みとりとしての矜持である。
「……冴月麟本人に話を聞いた、と言ったな」
慧音が口を開く。
「ええ。まさか、彼女が嘘を言っていると言うつもりで？　まあ、それも有り得なくはありませんが。年数が合わない理由はまだ分かりませんしね」
「彼女は、その日の天気は何だと言っていた？」
「天気？　満月の綺麗な夜だと言っていましたよ。全力の吸血鬼に打ち勝ったと」
「ああ、そうか、そうか。それなら嘘はついていないさ」
……一体彼女は何を言いたいのだろう？　天気になんの関係があるというのか。紅霧異変は確かに赤い霧が出た異変だが……
……霧？

「……まさか、その夜は」
「ああ、そうだ」
慧音はひと呼吸おいて、言った。
「その日は、霧も雲も一つない晴天だった」
冴月麟は優しかった。
どこかで悩む者がいるなら、すぐに飛んでいき悩みを解決する。博麗の巫女よりもよほど巫女らしい妖怪と評判だったという。
だから今代の巫女、博麗霊夢もだらけていたのだが、それはさておき。
冴月麟は優秀だった。
幻想郷はたまに世界自体を揺るがすような異常事態が起きている。けれど冴月麟が覚えられていた頃は、そんな事態は一件もなかった。
簡単である。起こる前に止めていたのだ。大事件を起こしそうなフラストレーションのたまった妖怪の元へ行き、解決策を提示する。その時も決して手は出さず、ただ話し合いだけで双方を納得させたのだという。
スペルカードルール制定のきっかけとなったあの吸血鬼異変ですら、本当は無かったものだというのだ。それでも紅霧異変を始めるあたり、さすがレミリアだが。
冴月麟は強かった。
冴月麟は理想的だった。
――ただ一つ、冴月麟は幻想的でなかった。
「そう、紅霧異変が始まる前に、麟はそれを察知して紅魔館に行ったんだ。悩んでいる者を放っておくことは出来ない、そう言ってな」
闇の妖怪の弾幕をかいくぐり、次へ向かう。自身は一発も弾を撃たずに。
「だが麟は人の悩みの解決を気にするあまり、その原因までは知ろうとしなかった。過去を気にせず未来を考える。麟は、現在が見えていなかった」
弾幕を展開する氷の妖精に近づき、弾を食らうのも気にせず頭を撫でて一言。『また今度、遊んであげる』。

紅い館の門番と討論し、一時間かけて説き伏せ門を開けさせる。やはりあなたには敵わない、そんな言葉を背に受けて。
「……妖怪は恐れに生きるものだ。何もかも会話で納得されたら、これほど不愉快な事はない。お前で言うならそうだな、『発明品は要らない』『今ので間に合っている』。そう言われ続ける、と言えば近いか」
四方八方、図書館を埋め尽くす魔法の波。
その一切を彼女は気に留めず、未来の元凶の居場所を聞き出す。
八方十六方、廊下を舐め尽くしたナイフの嵐。
それの中にいて、彼女は不思議にも傷ひとつない。
そして彼女は一方を見つめる。
紅い館の、異変の主を。
「もちろん、彼女を亡き者にしようと考える者は多かった。まだルールは定まっていなかったのもあって、妖怪が一匹消えたとしても何かの事故としか思われない。あの頃は、よくある話だったしな」
「なのに麟は、麟の言葉を信じるならですが、紅魔館に行くまで亡くなることはなかった」
「そうだ。だが、決して彼女が戦いに秀でていたわけではない」
「なら、どうして？」
紅く幼い異変の主は、無慈悲にも彼女にその鋭い爪を振りおろし――
「その不文律を突き通す力を、彼女が持っていたからだ。だから私はそれを恐れ、彼女のすべてを消すことを決意した」
「……それは、一体」
「知っているだろう」
彼女が口を開く。
『冴月麟の表皮は、硬い鱗である』
――爪が弾かれた、高い音がした。
「『名前を操る程度の能力』。物を名付け、その性質を決めつける力だ」
名前は、そのものの性質の始まりである。
それに付随する性質が良いものであればものも良くなり、悪いもの

であればものは悪くなる。
だから人の名前に関する習慣は枚挙に暇がない。諱、諡、仮名、字、戒名、洗礼名、号、筆名、レサク、ラカブ、言霊、呪詛、苗字……少しでも良い性質を与えてやろうと、聖人の名にあやかったり、自らの親族の名を与えたり。名前を呼ぶのはその人のすべてを握る事だと、本当の名前を隠す習慣すらあった。名前にはその人のアイデンティティすらも宿るのだ。
なればこそ、適当な名前を付けることなど許されない。
それを勝手に決め付ける力。
あまりにも無慈悲で残酷で絶対的な力。
それは、まるで――
「なるほど。まるで全能神ですね」
「ああ。そして、あらゆる全てに効く恐ろしい力だ」
どれだけ善良でも。
どれだけ努力をしても。
どれだけ皆の事を考えていたとしても。
彼女は、消されて当然だったのだ。
「彼女は、妖怪からは不興を買い、人間からは感謝され、何もかもを変えてしまえる力を持った妖怪だ」
「博麗の巫女が退治すれば、その評判は地に落ちる」
慧音は小さく頷いた。
「妖怪が殺そうにも、下は絆され、上はその全能の力を万が一にも受けたくない。そもそも、そう企んだ時点で彼女は来る」
「だから、彼女とはまだ繋がりの薄い、レミリア達を利用した」
今度は、頷かなかった。
代わりに、短い沈黙が訪れる。
「……不意を打ち、一撃で終わらせる力を持った、まだ麟が把握していない人物。フランドールをおいて他にはいなかった。彼女が破壊し、私が痕跡を消す。その手筈だった」
「……その言い方」
「ああ。初めから、麟は消すつもりだった」

思考が白く染まる。
意識が消える。
気づけば、私は上白沢慧音の胸ぐらを掴んでいた。

４５７８６２

たっ、たっ、た。
もう日も登ろうかという幻想郷で、不思議と軽やかな足音がする。
たっ、たっ、た。
妖怪ではない。人間でもない。格好はまるで一昔前の探偵のよう。キャスケットに白いシャツ、格子柄のストールと茶色の短パン。少し焼けた肌のような色のショルダーバッグを掛けている。
そして背中に、小さな羽。
たっ、たっ、――ざざっ。
足音が不意に止んだ。
その足音の主、彼女の目の前には――

「ついに見つけた……！」
野を越え、谷越え、三千里。苦節三日、ようやく僕は辿り着いた！
この自然豊かな幻想郷で、不自然なほどに紅いこの館。見間違えようはない、まさしくここが！
「いや、でも安心はできないか。えーっと、全貌図全貌図……」
緋褪色のショルダーバッグから、大事な紙を取り出す。忘れっぽい僕の為に、友達が作ってくれた館の肖像画。このバッグと同じぐらい大事な僕の宝物だ。
「うん、場所も雰囲気もそっくりそのまま！　よし、いくぞー！」
僕は意気込みを新たにして、朝日を反射して明るく光る紅魔館を見上げたのだ！

「おはようございます！　ごめんくださーい！」
「ほえ？　はい、はい。なんでしょう、こんな朝早くに」

まずは門番さんに元気にあいさつ！　この時点で試験はもう始まってるから、どんどん僕をアピールしていかないと！
「番号４５７８６２です！　試験を受けにきました！」
「ああ、そういえば今日がそうですか。まだ会場設営中ですがどうぞどうぞ」
「ありがとうございまーす！」
門番さんが鉄格子の門を何度かたたくと、大きな両開きの門は音もなく開いた。すごい！　門番さんは門を押してないのに、どうやって開いたんだろう！　面白い！
「……気になるなら、触ってみますか。時間はまだありますし、何やっても壊れませんし」
「いいんですか！　いいんですか！」
「ええ。減るもんじゃないので」
「やったー！　ありがとうございます！」
門番さんにペコリと頭を下げてから、門をなでてみる。不思議だ、どう触っても鉄の手触り、何も変わったところがない！　すごいすごい！
「ふふ、面白いでしょう。たたき方で動きが変わるんですよ、ほら」
門番さんが中に入り、さっきのように右の門をたたく。すると今度は門が右だけ閉まった。
「おおー！」
「ふふん。なんだかちょっと嬉しいですね。門番として門に興味を持ってもらえるのは」
僕も左の門を同じようにたたいてみたが、なぜだか僕では動かせない。なんだろう、手の大きさが違うのかな？
「ああ、いきなりは動かせませんよ。同じタイミングと同じ強さでたたく。これができなければ、門は動きません」
「タイミング？」
「私とまったく同じようにやらないとダメってことです。まあもともと、右と左の門ではタイミングが少し違うので動きませんが」
「なるほどー！」

ということは、僕は左の門は動かせないということだ。じゃあさっき見た右の門は動かせる！

僕は右の門に近づき、さっきの門番さんのように叩いてみた。こっこっこっ、こっこっこっこっ。かしゃん。……何も起きない。

「ははは、普通はできませんよ。私だって三週間ほどかけたんですから。もしできたら、何でも一つ言う事を聞いてあげてもいい」

「むー！」

その言葉で僕はやっきになって門をたたき続けた。……動かない。まったく、少しも。

「ははは。『閉めるやり方』では閉まってる門は動きませんよ。……まあ、今さっきあなたが叩いた叩き方、全く狂いのない『鍵をかけるやり方』なんですけど……」

門番さんがぽそりと呟いた。やり方？　なるほど、それなら最初に門番さんが使ったのは『開けるやり方』のはず。つまりあれを真似すれば！

えーっと、あれはそう、この辺をこんな感じにたたいてたような……

「……ん？　あの、そのリズムは、あのちょっと」

こーんこ、こーんこーんこ、こんこんこんここ……

「こん！」

「ちょっ！　ああ！」

ためしに門番さんと同じようにたたいてみると、門が鳴り始めた。けれどその音はとってもうるさくて、まだ日が登ったばかりの幻想郷には合わない感じ。

「あれ、もしかしてまずいことしちゃった？」

「てい！」

門番さんは急に左の門も閉めて、何が起きたのか考えていた僕を門の中に取り残してしまった。それと同時に音も聞こえなくなって、とても静かになった。

「えっ！　どうしたんです、門番さん？」

「あはは……何でもないですよ！　ところであなたは何番でしたっけ

？」
「えーっと、４５７８６２です！」
「４５７８６２ですね。そうですか、私は紅美鈴といいます、試験頑張ってくださいね！」
「ありがとうございます！　ところで美鈴さん、どうしてそんなに汗をかいてるんですか？」
「いいいいえ、お気になさらず！　会場までは迷わないはずですが、もし迷ってしまったら近くの人にお気軽に聞いてくださいね！　それでは私は門番の仕事がありますので！」
「え、あっ！」
　そう言うと美鈴さんはささささっと壁の向こう側に行ってしまった。
一体どうしたんだろう？　まだお別れの言葉も言ってないのに。
「ありがとうございました！　って、聞こえてないだろうなあ。ならせめて、帰りの時には言わせてくださいねー！」
　僕はそう言い残して、館の方を向いた。
　右手には静かな庭。左手には騒がしい庭。目の前には館。なるほど、美鈴さんは会場までは迷わないと言っていた。つまり、一番目立つこの館の中が会場に違いない！　とりあえず館の中に入ればわかるはず！
「ふっふっふ。待ってろ、面接官めー！」
　そう言いながら、僕は館の方向へ走り始めた。

「おはようございまーす！　４５７８６２番です！　試験を受けにきましたー！」
　ドアを開けてまず一声！　本当ならノックして呼ばれてから入るべきだけど、この広い館ではノックしても誰にも聞こえないだろう。だからあえて突撃！　状況に合わせていけるところも見せていかないと！
「おはようございまーす！　……まーす、まーす……」
　おおっと、これは予想外だった。見せる人どころか妖精一匹いな

い。うーん、どうしよう？　聞く人がいないんじゃ迷ってもどうにもできないや。
いや、もしかして館が広すぎてこっちに来ていないのかな？　なら少し待とうっと。幸い館の中はとっても綺麗で、見ているだけでも飽きが来ない。エントランスを見回すだけでも退屈しなさそう！
「うわー……！　この花瓶とか、作るの何日かかるのかなあ……」
僕はとりあえずエントランスを飛びまわってみた。
まずは目の前にあった階段周り。その次に入り口の左右、二階とつながる通路、窓の近く、正面の壁の上にある通路、壁にかかる大きな絵の裏側、……ああ！　どこも面白くて見切れない！
目に飛び込むもの全部にぐるぐるやかくかくした飾り？　模様？のようなものがついている。でもよく見てみると、その模様の中にまた模様があったりして、いくらでも眺めていられる！
「すごいすごい！　……あれ？」
そんな像や柱の中に、不思議なものが一つ。
普通の時計だ。このいろんなふうに飾り付けられている館の中で、唯一何もついてない、月白色のただの柱時計。それが階段の近く、目立たないところに置いてある。なんだろう、これは？
「うーん？　……」
いつもの僕だったら、気になって触ろうとするんだけれど。なぜだかその時計の近くには、近づいてはいけない気がした。なのに目は離せない。寒気がするような白だけど、不思議となんだか懐かしいような……
「気に入ってくれて何よりだよ、４５７８６２」
「うひゃあ!?」
夢中でぼうっとその時計を見ていると、急に後ろから話しかけられた。驚いて後ろを振り向く。
そこにいたのは……女の子？　青い髪の小さい女の子が、ひらひらのたくさんついた服を着て立っている。身長は僕と同じくらいだ。羽はないけれど、……もしかして？
「くく。驚くのも無理はない。そう、私こそがレ」

「もしかして、一緒の試験受けに来た人!?」
「……え？」
「そうよねそうだよね！　良かった、誰もいなくて困ってたの！　もし良かったら、試験会場を教えてくれない？」
「いや、私はこの館の……というか、会場ならここじゃないわよ。庭が騒がしかったでしょう？　外でやるのよ」
「ああ！　なるほど、そういうことだったのか！」
　僕がぽんと手を打つと、女の子は頭を抱えた。具合でも悪いのかな？
「どうしたの？　大丈夫？」
「……問題ないさ。ところで、その時計をどう思った？」
「え？　うーん、近寄りがたい感じ？」
「そうか」
　女の子はそれだけ言って、黙ってしまった。もしかして本当は、あんまり喋らない子なのかな？　それとも、試験に向けて緊張してるとか？
　それなら、僕が言う言葉は一つだ。ずっと昔に言われたのと同じ言葉。
「……なあ、もし試験に受かったら」
「ねえ、僕と一緒に行こう！」
「少しぐらい私の意見も聞いてくれない？」
「もー、つべこべ言わずにさ！　ほら！」
　僕は女の子の腕をつかんで、ぐっと引いた。女の子は少しつっかかりながらも、一緒に歩き始める。
「きゃっ！　とっ、と、おい待て、まだ話は終わっていない！」
「歩きながら話そう！　そのほうが気分も晴れるし、一緒にいれば緊張もほぐれるよ！」
「私は晴れたら死ぬんだよ！」
「またまたー、そんな言い訳しちゃって。肩の力を入れたままじゃ、うまく行くものも行かなくなっちゃうよ？」
「それはそうだが……ああ！　もういい！　４５７８６２！　試験に

受かったらもう一度ここに来い！　いいわね！」
「もちろん！　一緒に頑張ろうね！」
「なんか違う受け取り方されてる気がする！」
　僕達二人はそんなふうに話しながら、館をあとにした。

「おはようございます！　４５７８６２！　ただ今到着しました！」
　会場の庭に向かって元気よく挨拶！　けれどなんだか、人があんまりいない。庭はとっても広いし、椅子やテーブルやそれにつけるパラソルなんかがいっぱいあるのに、働いているメイドさんは二人しか見えない。あれれ？
「まだ早い！　一時間前行動だ！」
　僕がそのことについて考えこんでいると、青い髪の女の子は鋭い突っ込みを入れてきた。うんうん、この子も元気が出てきたみたいで何より！
「あら？　あららー。もう来ちゃいましたかー。おーいワンドット、どうしますー？」
　場所についてすぐ、テーブルを立てていた妖精のお姉さんが、おっとりとした声で人を呼んだ。薄浅葱色の長髪をおでこが見えるように分けていて、笑顔からわかる声と同じほんわかとした雰囲気！　それにとってもメイド服が似合う！　ああ！　あれが僕の憧れ、妖精メイド！
「かわいい！　かっこいい！」
「あらあらー、素直な子ねー。うふふ、あなたも可愛いわよー」
「あ、ありがとうございます！」
　た、大変だ！　妖精メイドさんに褒められてしまった！　どうしよう、顔がついつい緩んでしまう！
「にへら～」
「やばい、そろそろ朝日が……。お前、もしかしてあのシーアか。ちょうどいいわ、パラソルを一つ貸してちょうだい」

「どうぞどうぞー。って、おはようございます、レ――何とかさん。どうしてここにいるんですかー？」
「……成り行きで私も受けることになったのよ。まあ、抜き打ちテストということにするわ。私もあなた達もね。誰にも言うなよ？」
「はーい、わかりましたー。後悔しないでくださいねー」
「わかっている……いや待て、後悔ってなんだ、おい」
「ふふ～、今のうちにそのひらひら、着替えたほうがいいですよ～。ここにいる間は受験生様～。はい、パラソル」
「……お手柔らかに」
「にへら～」
「しつこいな、こいつは」
うう、早く元に戻さなきゃ。ここでいつまでもにやついているわけにはいかない！　アピールしなきゃ！
「あの！　何か手伝うことはありますか！」
「その意気や良し！」
「ひぃ！」
気づけばそのおっとりお姉さんの横には、腰に木刀を差した妖精メイドさんが立っていた。
同じメイド服だけど、印象が全然違う。少し焼けた肌で、手を前で合わせているお姉さんとは逆に、腕を組んで堂々と立っている。顔はとっても笑顔で、つり目でなんだか驚いているような目。真っ赤な癖っ毛を頭のてっぺんで適当に纏めている。なによりびっくりするのが身長で、ここにいる誰よりも高い。机に付いているパラソルと同じくらいだ。
僕がまじまじと顔を見上げていると、つり目がぎろりと動いて僕らのほうをにらんだ。な、なんだかこの人、こわい……。
「ワンドットー、あんまり怖がらせちゃダメよー」
「分かっているさ！　それにしても驚いたな！　まさか妖精メイドになる前からこんな殊勝な心がけの妖精がいるとは！　よろしい、ついて来い！　貴様に労働の喜びを与えてやろう！」
「うぁ、は、はいぃ！」

勢いに飲まれそうになりながらも、なんとか耐えて返事をする。気をしっかり持て！　これもアピールポイントだ！

「上官殿、私もついていってよろしいですか？」

僕が必死で耐えている横で、青髪の女の子は普通に妖精メイドさんとお話ししていた。い、意外と度胸あるなあ、この子。

「む？　構わんぞ！　好奇心は大切にしろ、というのは我が主の意向だからな！」

「……そんなこと言ったっけ。まあ、いいか」

「それにどの道！　そんなふわふわした服では試験は受けさせられん！　私の服を貸してやるから、一緒に来い！」

「恩に着ます。……え？　あなたの服？」

「ゆくぞーっ！」

赤い髪のメイドさんは、そういって会場を出る方向に一目散に駆け出していった。

「えっ、待って下さいー！」

「ねえ！　あなたの服ってサイズが……ちょっとー！」

僕達も慌ててその後をついていく。あのメイドさん、すっごく早い……！　頑張ってついていかなきゃ！　これもアピール、アピール？　ポイントだ……！

「ふー、行ってしまいましたかー」

……

「それにしても、あの人と仲良くなるだなんてー。これは今回も面白そうですねー」

……

「そう思いませんかー？　チーシャーナーさぁぁん？」

「……ワタシ、シラナイ、アイム植え込みぃ」

「ていっ」

「ひぎゃあ！　目が！　指の感触がぁ！　ん？　いやでもこれもありかも新感覚ぅ！　もう一発プリ……ぎゃー！」

鬼とは勝手なものなのです（煽り）

おお、おお、姫様よ。何が悲しくて泣いているのですか。

――泣いてなどいない、ですか。それはまた、大胆な嘘を吐きなさる。

おや、驚きましたか。鬼が嘘に怒らないことに。はは、私は少々異端なのですよ。

何の用、ですか。ここへ伺う以上、あなたと話をする用だと思うのですが。それとも、他の方は違うのですかね？

……おっと、無理に仰る必要はございませんよ。これは脅迫や諜報ではありませんし、そもそも突然出てきた私を信じるという方がおかしいのですから。

それに、そんなことを拝聴するために私は参ったのではありません。あなたのその暗い顔を明るくするために参ったのです。

――閉じ込めたくせに、何を勝手なことを。ええ。鬼とは勝手なものです。ですから勝手にあなたを笑顔にしましょう。

――根拠は。そうですね。私の二百余年、外の世界の旅の話などどうでしょうか？

――興味がない。なるほど、了解しました。それなら耳を塞いでいただいてもよろしいですよ。私は甘んじて独り言を申しましょう。

準備はできましたか？

やはりまずは、この話をいたさなければなりますまい。

ダイダラボッチ。その体は遥か天まで届き、海を数歩で渡り、それが歩けば足跡は湖に、穴を掘れば掘った土は山々に変わるという、伝説の怪物にございます。

私はこの怪物を探しておりました。それだけ大きいのであれば、その分強いに違いない。鬼は強きを求めては、戦いに馳せ参じるのが生き甲斐なのです。何としてでも会ってみたいと、私は噂を辿り、その伝承の残る集落へ赴いていました。

そうして辿り着いたのは、とある山中の程々に大きな村です。洞窟の向こう側にあったその村は、不思議なほどに空は青く、不自然なほどに草花が咲き乱れておりました。それもそのはず、その村には薄くはあれど魔力が満ちていたのです。

最初は妖怪の手に落ちた村かとも思いましたが、どうやら違うようです。本質はその逆、妖怪に抗うために、自分たちだけでなく村そのものに手を加えた人間たちが住む村だったのです。

これほど熱心に妖怪に対策を講じている村ならば、だいだらぼっちの伝承や伝説、最悪でも退治譚なら得られるやもしれません。私は期待に満ち溢れたままに、その村へ足を踏み入れました。

しかし、そこではたいした収穫は得られませんでした。私はその怪物の現在を知りたいのに、やれ山を持ち上げたことがあるだの、子供を手に乗せて一緒に遊んだ伝説が残るだの、皆他でも聞いたような過去の話ばかりするのです。誰一人、ダイダラボッチの今を知る者はおりませんでした。

それどころか、私を見て『こんな若い子が旅をするとは、感心感心。どうぞゆっくりしなさい』などとのたまうのです。ああ、あいつらめ。見た目でわからぬか。奴らを忘れてしまったのか。一体私をなんだと考えて……

……失礼、話を続けましょう。

私はその集落に早々に見切りをつけ、近くの山へと向かいました。人間がダメなら、妖怪に聞けばよろしいのです。私は鬼の権威を笠に着て、目についた妖怪たちに片端から話しかけていきました。カラカサ、チョウチン、ハンザキ、イヌガミ、ハジカキ、イデモチ、イソガシ……

そうすると、一つ不思議な情報があったのです。曰く、

『ダイダラボッチは存在する。けれど、実在しない』

意味がわかりませんよね？　私もそうでした。居るのか居ないのかはっきりしろと、私は少し怒り気味に言いましたよ。しかしそうしても同じ言葉を繰り返すだけなのです。

これでは埒が明きません。私は妖怪たちと別れ、自力で探すことに

しました。嘘を言った方は一人もいないわけでしたし、ダイダラボッチがここにいるのは間違いないはずなのです。非効率ですが、やるしかありませんでした。

それから私は、山を探しに探しました。

日が落ちては沈み、登っては下り、登っては下り。大きな山でしたから、それはけっこうな冒険でした。私は皮膚は頑丈な方ではありませんから、草葉で切れますし虫に刺されますし猪にも殺されます。山の中で宿を取るのも一苦労でしたよ。

そして三日ほど経った夜、私は一つ洞窟を見つけました。

この時私は、ただ幸運だと思っていました。雨に打たれれば風邪を引くのが私ですからね。最悪人間の里まで下りればいいのですが、……まあ、食べるわけでもない彼らの甘さに付け入るというのも、妖怪としてはよくないので。ですから、雨風が凌げるだけでうれしかったのです。

しかし、それはただの洞窟ではなかったのです。その奥にいたのは

――

――如何なさいましたか、そんなに目を輝かせて。

――違う？　何でもない？　そうですか。では続けますよ。

――そこにいたのは、齢十つを数えるかというころの童。奇妙に上にはねた青い髪で、青地に赤い花をあしらった着物を着た童でした。それが蝋燭の前で踊っているのです。

一体何をしているのか。私は声をかけました。

童は驚きながらも、その外見に見合った無邪気さで教えてくれました。

影を作っているのだ。

つまり、遊んでいるのか？

いいや違う。いつかまた、表舞台に戻るための練習だ。

なるほど、影芝居。

芝居だと？　我が誇り高きダイダラボッチの技を、あんな娯楽と一

緒にするな！
ああはいはい、ダイダラボッチか……
私は少々呆れてしまいました。というのも、集落にも同じような童がいたからです。ダイダラボッチの名を借りて、自らを敬わせようとする童の大将。私は、彼女もそれと同じものだと直観し、話を切り上げようと荷物を下ろしました。
しかし童はまだ喋り続けます。
何だその顔は。お前、信じてないだろう。
信じてる信じてる。たとえお前が私よりちびっこくても。
ちびっ、う、うるさい！　お前こそ随分器が小さそうな顔じゃないか。大方家出でもしてきたのだろう？
そんなちんまい煽りには乗らん。第一私に家はない。
な……すまない。気が利かなくて。
……お前、ダイダラボッチを名乗る割には気が小さいな。
そんなにあの手この手で小さいを連呼しなくてもいいだろ！
だって、どこもダイダラボッチらしさが無いじゃないか。せめて身長六尺くらいになってから言えよ。
私がそう言ったのは、単なる言葉のはずみでした。言葉の綾。軽口の一つ。しかし私はすぐに、言ったことを後悔することになりました。

――そうか、六尺程度でいいのだな？

そうして私は――妖怪たちの言った言葉の、真意を理解したのです。
妖怪たちは、けして私を欺こうとか、意地悪しようとか、そんなつもりでああ言ったのではなかったのです。本当に探すのか、落胆しても知らぬぞと、私を気遣いながらも言っていたのです。私はそれを踏みにじっていたのだと、すぐにわかりました。
突然目の前に、大きな人影が現れます。
その大きさたるや六尺どころか八尺はあるでしょうか。体軀もそ

れに見合った筋肉質。腕は丸太のように膨らみ、脚などは私の腰よりも太く力強く。とても私一人では勝てそうにない大男の人影でした。
当然私は焦ります。よもやこの童、私を嵌めたか。無邪気そうに遊ぶ振りをして旅人を誘い込む、野盗の一味であったのか。
そう考えながらも、私は思いきりそいつの体をひっくり返しました。先手必勝、一撃必殺。そいつは勢い良く岩場に頭を打ち付け、血を流して絶命する。それぐらいの覚悟でやりました。
ですが男は死なず違わず。倒れたあとに頭も擦らず起き上がり、私に襲い掛かるのです。これは何だ？　私は驚きの冷めやらぬ間に、間一髪、男の突進を躱しました。
私の渾身の一撃を受けて生きているならば、それはもはや人ではありません。そうならば童も人ではなくなります。童相手といえど妖と人が組むなど絵空事。つまりは揃って妖同士なのでしょう。
妖は身勝手で利己的。手を組むなどということは、よほど強大な長がいなければ有り得ません。さんざんばらに山を練り歩いた後です、例えばここの山の長の機嫌を損ね、ここで始末を命じられたとしてもおかしくはないでしょう。ならば麓の妖怪共も、教えてくれれば良かったのに。私はこの時そう考えていました。
童は笑います。

どうだ、どうだ！　私が誰かこれで分かっただろう、死にたくなければさっさと出ていけ！
ちっ、分かんねえな。私は何もしてないのに、なんで出なけりゃならんのだ。
おっ、まっ、えっ、な！　言葉が人を傷つけるのを知らないのか！
最低だな！
言葉？　そんなぶつくさ言いながら歩いてた覚えなんて……ああ、そういえば悪態つき続けてたかもな。こんな辺鄙な場所に住んでんじゃねえ、って。
違う！　そんな陰口ごときを私が相手にするか！　小さいって言ったことだ！

何だ、そんな事か。じゃあ謝るからよ、っと。こいつ止めてくれ。お前の仲間なんだろ？

……本当に謝ってるんだろうな！

本当本物本気本気。ほら、さっさと……っ！

不意に、私は体勢を崩しました。鋭い草葉の中を無造作に歩いていたもので、ついに私のつっかけが限界に来たのです。帯が千切れ、傾いた私の頭に鋭い岩肌が迫ります。

そんな事とは露知らず、大男が私に向かって再び突進してきます。前は大男、横は岩肌、後ろは月明かりが冴える夜。普通に考えるなら、後ろしかありません。無理矢理に地面を蹴り、私は後ろへ飛び退きました。

しかし不運とは続くものです。千切れたつっかけの帯が絡みつき、私の足を取ります。

#

「これで今日の買い物は終わりですか」
「ええ、お疲れさま藍ちゃん」
「それにしても珍しいですね、紫様が直々に買い物するなんて」
「珍しくないわ。こんなに買い込むのはたまーにだけど」
「そうですか？　いつも私に全部買い物を頼んでませんでしたっけ」
「藍ちゃんじゃ買えないものもいっぱいあるの。今日買ったもの、ほとんどそうよ」
「嘘ですか」
「嘘よ」
「どれくらい嘘ですか」
「半分くらい」
「半分は買えないものなんですね」
「教えないわよ。気づきなさい、それが一番の学びだわ」
「そういうのは気づかせるだけのヒントを播いて欲しいんですが」
「……藍ちゃん、ずっと荷物持って疲れたでしょう。あそこで休まない？」
「播き忘れですか？」
「播き始めよ」
「いらっしゃいませ！」
「藍ちゃん、家まで保つかしら」
「余裕です紫様」
「ちょっちょ！　待ってくださいよお客様！　まだ何も言ってないじゃないですか！」
「何もも何も無いわ。何をしているのアナタ」
「え？　商売」
「紫様、『怪奇！　魔法のないマジックショー！』だそうです。表の看板にありました」
「何、もしかして看板も見ずに入ってきたの？　それならむしろ好都合かも！　せっかく日銭を稼ごうと思って準備したのにさ、誰も入っ

てこないんだもの。ちょうど周囲の反応が気になるところだったのよ」
「そりゃ、ショーじゃ来ないわよ。とりわけマジックショーなんて馴染みが無いもの」
「うぇ、マジかぁ。薄々そうじゃないかと思ってたけど」
「やるなら里の大舞台でやればいいじゃないか。適当な吟遊詩人か誰かに音楽を任せて。なんでこんな里の裏通りなんかに構えるのよ」
「紫さん、この人どうして心を抉ってくるの」
「私はお客だからわからないわ。早く始めて？」
「ずっる！　都合のいいときだけ！」
「……見ていくんですか？」
「ええ。私を引き止めるなんて本当に無害みたいだし、暇潰しに見ていきましょう」
「……潰せるほど暇はありましたっけ？」
「帰ったら暇づくりに邁進ね」
「過程と結果が逆です、紫様」
「レディースアンドガールズ！　宇佐見菫子のスーパーマジックショー、開幕だぁ！」
「お客を待たせない、花丸っと」
「ステージに立つと人が変わるなあの子」
「まず取り出しましたるはこちら。至って普通の中世の剣」
「どっちかというと近世ね。小さいし」
「前フリもなくテレポートで出したけど、いいんですかね？」
「私はこれが大好物だから食べてしまう」
「えっ」
「えっ。どうされましたか」
「い、いや、私、スナッフビデオの耐性はなくって」
「……これ、ショーですからね。邪魔しないで下さいね」
「わかってる、わかってるけど」
「いっふ、ふぁふーはーはひっふひょー！」（It's the super magic show）
「タイミングがおかしい、#（ハッシュ）」

「ひひゅう(二重)はふ(バッ)!?」
「ふぅっ……」
「紫様。大丈夫ですか、お顔が真っ青ですよ」
「え、ええ。まだ行けるわ、まだ大丈夫」
「うーん、この濃厚な鉄分！　１７世紀のハンティングソードと見た！」
「こいつまるごと全部行きやがった」
「あわわ……」

披瀝

「うー……ん」
「おりょ?どったの、正邪ちゃん」
紅魔館の午前二時。昔は吸血鬼たちが猛威を振るった時間。
だが今ここを支配するのは、用もなくこの時間に起きた物好きと、ただただ悩んで眠れずにいた物好きだ。肝心のここの主とその妹は、夏の終わりの涼やかな風にあっさり寝つかされてしまった。
まったく、自然ってのはつくづく偉大なもんだ。
「ん、こいしか。何でもねえよ、ちっとくだらねぇ話だ」
「ふーん」
こいしは枕に抱きつき、広いベッドの上を転がりながら話を聞いている。
なんかその抱き枕、羽が六本生えてる上にアホ毛が伸びてる気がするんだが。まあいいか、普段私を悩ます奴だ。今日ばかりは存分に快眠を邪魔されるがいい。
「つまーり略して、何の話?」
そんでこいつも私を悩ます奴なのだが。見つかれば最後。興味があれば一直線。道が無くても暴走馬車。
こうなればはぐらかしも無意味、話すまでな行を連呼され続ける。それを知ってる私は観念するしかなかった。
「私もうまくは言えねえがよ。こいし、今日は楽しかったか?」
「あら、そんな事聞くだなんて。言うまでもなく楽しかったわよ。地上の小さい商店でも馬鹿に出来ないものだと思ったわ」
ま、お前はそう答えるよな。こいしにとって楽しくない出来事なんてない。どんなに無駄だったり辛いことであっても、こいつはどこからか楽しみを見つけてくる。そうして最後には全部を楽しく変えてしまうのだ。こいつが一番、妖怪らしい妖怪だと思う。
「だろうな。私も……まあ、面倒くさかったよ」
「でしょでしょ!っとと、静かにしないと。で、一体何が不満なんだい」

こいしが不思議そうに目を向ける。さて、言うか言わずか。その逆さを信じてる輝いた顔に。
開いていた窓から月を見上げる。そこにあったのは満月。いつだって澄んだままの、さも美しげな狂気だ。私はそこに、懲りも飽きも後悔もしない、純粋な狐を見た気がした。
ああ、あれは、いつだって躊躇わないのか。
なら言うか。あれに負けるのは癪だ。私は月に目を奪われたまま、口を開いた。
「『面倒くさかった』のさ、こいし。本当は『楽しかったのに』」
「……それは、どっちが嘘？」
「嘘じゃねえよ、逆だ」
淡々と告げる。まるで何でもないことのように。いや、本当に何でもないのだ。少なくとも私はそう思っている。思ってしまっている。
「私は天邪鬼だ。けど、面白いことを面白いとすら思えないほど腐ってるわけじゃねえ。ただ口に出さないだけだ」
「この事についちゃ随分饒舌なのね」
「最後まで聞きやがれ。そうさ、今まではそれで良かったんだ。嘘つき続けて、私を保てば良かったんだ。それが天邪鬼で、私だから」
一度堰を切った言葉は、つらつらと流れていく。
私は宴席には参加したことがない。だから吐き出す場所がなくて、こうやって貯まるのかもしれない。だとするなら、今度からちょくちょく酒場の世話にでもなるかね。
まあ、それも今度からだ。だから今日は思いっきり、こいつに迷惑をかける。
「けど今日はな、なんか曖昧だったんだ。真実があるから嘘をつけるってのに、真実も嘘も一緒になっちまったような」
「ははーん、要は自分の気持ちがはっきりしなくなっちゃったのね。閻魔さま呼んじゃう？」
「……それも、ありかもな」
「やっぱそうだよねー。……え？」
こいしは豆鉄砲でも食らったように、体を硬直させた。相変わらず

こいつの目は髪で見えないので、あいにく丸くなってたとしてもわからない。でも面食らっているのは仕草からわかる。……まあ、無理もないわな。

「え、え、閻魔さまだよ？嘘つきの正邪ちゃんには、天敵で不倶戴天でルナ六面ボスみたいなものよね？なのに、呼んでもいいって」

「だから言ったろ、曖昧なんだ。現に閻魔でも何でも、私を変えられるなら来てみろよって思ってる」

「曖昧というか、ただの適当じゃない？いや、この場合自棄って読むのかしら」

ヤケ、か。それも正解だろう。

面倒くさくて、楽しくて、でもそれが全部何でもないように、どうでもいいようにすら思える。確かに、ヤケは近い。

けどそれも少しだけズレているような。

「なんつうのかね。うつ？」

「うつじゃないわ。それだけは絶対にあり得ない」

こいしはきっぱりと言い放った。何だ、何をそんなに怯えているのやら。まるで本物を見てきたような面して。

……能力が能力だ。見たことあるんだろうな。忘れがちだがこいつは昔覚りだったんだし。配慮が足りなかったかね？ま、どうだっていい。

「な？　わからねえんだ。分からねえし、分かろうとも思えん」

「んー、残念。私もわからない」

「だろうな。けどいいさ、別に。ここで『超わかる！こうすればいいんだよ！』とか言われても、って感じだし」

「あははー、確かに。こういうのって答えがない、というか人によって答えが違うもんねえ。人の答えを参考にするくらいはできるけど。あ、やる？」

こいしの恋の瞳から新しく、八本ほどコードが伸びる。先が尖った特別製だ。

前に聞いたが、これを相手の体に刺すだけで、こいしの見る世界を共有することができるらしい。あらゆる意識の混ざり合う、集合的無

意識の世界を。
無論そんなのお断りだ。まともな精神してる奴が無意識を覗けば、一発で自我が吹き飛ぶ。私が変わるのは間違いないが、それは変わるというより狂うと言うのだ。それは御免である。
「やめとく。そもそも正解が欲しくて言ったんじゃねえし。さて、話したから満足だろ？ガキはさっさと寝やがれ」
「へーぇ？そんなふーに言うんだ。ほー」
やめろ。刺さるか刺さらないかぎりぎりの位置でコードを揺らすな。……ああ、くそ。うっとうしいな、こいつ。だから言いたかなかったんだ。
そう思った瞬間、コードはすっと引っ込んだ。
「まあ、それならいいわね。こういうのは一人で答えを見つけるものだもの。ガイシャはさっさと寝ますよーだ」
「ブをつけろブを。お前は何もされてねえだろ」
「何もじゃないわ。話された」
「……はっ。ずいぶんと突き放してくれるもんだな。私好みのいい友人だことで」
私が言ったその言葉は、何も言わずに私に背を向け布団にくるまったこいつに届いているのか。
それも、きっと、どうでもいいことなんだ。
「……けどね、正邪」
「あん？」
布団の塊から、声が聞こえる。それはくぐもった小さな声のはずなのに、なぜだか澄んで聞こえた。
「誰かと話すだけで、そんなのすぐに治ると思うわよ」
「……」
知ったふうな口を。そう言おうと思ったが、すぐにやめた。何秒も経っていないうちに、布団の中から寝息が聞こえたからだ。
代わりに負けを惜しむ。
「……言い逃げかよ。卑怯者」
布団から返事は無かった。

「怯は一体どちらなのかしら、天邪鬼」
代わりにどこからか、声があっただけだった。

静寂が訪れる。
耳が痛くなりそうなほどに静かな湖と、遠く鳴いているミミズクの声。そこに薫るそよ風が、私の眠気を誘うことは未だ無く。
私は空のかわりに、湖を眺めた。
夜空を切り取る黄色い目。
湖に浮かんだその偽物は、空にあるときよりも輝いて見えた。

おかえり　1

さりとて、暇なものは暇なのだ。
「んーっ、……はぁ」
逆立ちをしたまま伸びをして、私はそう言ってやった。
「そう思うんなら、正邪も参加したらいいのに。最近の異変は来るもの拒まず、よ？」
よ、じゃねえよ。お前参加してないだろ、フランドール。
「いいの。私は殿堂入りだから」
「弾幕ならまだしも、殴りあいアリだと死人出しそうだもんな、お前」
「たまに気にしてることをストレートに刺すわよね、貴女」
「お前が気にしすぎなんだよ。幻想郷の奴らが『あらゆるものを破壊する』程度で死ぬものか」
「正邪……」
おい、チョロ過ぎないか、悪魔の妹。この場面がメイド長に見つかって誤解されたらどうするつもりだ。
「そうそう、何なら私がタッグ組んであげるよ。もちろん私がスレイブ、フランちゃんはカメラ」
「こいし……」
気づけフランドール、その位置は戦力外通告だ。カタカナに騙されるな。あの天狗と同レベルだぞ。
「そんなに厄介な能力なら封じればいいじゃない。例えばそうね、ここに村で人気のお札があります」
「ぬ」
「待てぇぇい!!　それはしまぇぇぇ！」
逆立ちの体勢から腕の力で封獣のもとまでジャンプ。そのまま札を蹴り落とす。
「なにすんのよ、もしかしてオーソドックスに竹林の薬がお好み？　それとも茸派？」
「お前、そのラインナップはわざとだろ！　何とは言わないけども！」
次々と封獣の懐から出てくるアイテムを、私はひたすら叩き落とし

た。薬ビン、陰茸、ピンクの本、携帯、宝塔、兎の目。
「……こいし、あれ何の話？」
「誰かの理想の話」
「理想は所詮妄想よ。幻想には勝てない」
「だからってここに持ち込んでんじゃねーよ！　どうすんだよこれ！」
　地面に散らばったジョーカーたち。どれも単体だけで幻想郷支配は容易だろう。私は絶対使わねえがな！　どうなるか知ってるから！
「次来た客に全部渡すわ」
「新しい支配者を生み出す気かお前はァァァ！」
　広い広い紅の館に、私の声はよく響いた。

　さて、説明なくいきなり会話から入って困惑している者もいるかもしれない。
　でもこれで大体分かっただろう、私の現状が。
「あ、でもこれとかなんか面白そう」
　そこでキノコを拾っているのがフランドール・スカーレット。遥かなる常識人だ。だが、拾ってないで早く破壊しろ。
「それは美味しくないからやめときな！　こっちがいいよ、フランちゃん」
　キャラが安定してないコイツが古明地こいし。何をしでかすか全く予想できないので一番の危険人物だ。そんな奴が鬼殺しを手にしている。おい、誰か止めて。幻想郷の鬼殺しはマジ殺しなんだぞ。
「そこにあったのね、酒。じゃ、客が来るまで酒盛りでもしましょう」
　この状況を作った張本人、封獣ぬえはそう言って戸棚から紅茶のカップを取り出す。飲めねぇよ、格式高いよその猪口。
「待てよ。それ以前に、お前仏教徒だろ」
　そして私、天邪鬼の鬼人正邪だ。四人揃ってクレイジーカルテッ

ト。今日も紅魔館の一室に集まって、依頼が来るのを待っている。
場違いもいいとこだって？　私もそう思う。私の悲願はヒエラルキーの逆転だというのに、何をここでグダグダしているのか。何なら今すぐ全員ぶっ倒して出て行きたい。
だが今それをやっても返り討ちに合うのが関の山だ。それよりかは、こうやっていつでも首を狙える位置で力を蓄えるのが良い。
けして言い訳ではない。
「天邪鬼なんだからそんな小さい事気にするもんじゃないわよ」
封獣がカウンターを引っ張りだし、カップを並べる。この部屋ホント何でもあるな。つーかマジで飲むの、お前。
「何その『男の子なんだから』みたいなの」
「女の子だから欲望に忠実に生きていたい」
「女に対して見方が偏り過ぎだろ」
「すみません、日本酒、パリジャンで」
「フランドール、お前は馴染み過ぎ」
唇に手をやりカウンターに頬杖をつく。フランドールが妙に艶めかしい動作でオーダーしているが、忘れてはいけない、出てくるのは日本酒だ。
「あいよ、カシスの代わりに日本酒ぶち込めばいいかな？」
そしてオーダーを受けるのはこいしだ。カシス抜いたらそれはもはやただのマティ
……いや、なんでこいしがカウンターにいるんだ。どっから拾ってきたそのウェイター服。
「メイド妖精が交代でちくちく縫ってた」
「妖精にもそういう欲はあるんだな」
「で、正邪ちゃんは何飲むの？」
「花冷え」
封獣にああは言ったが、私自身は飲めれば何でもいい派だ。貰える時は貰っておく。
「熱燗ね、はいはい。はい、酒前酒」
日本酒に氷を入れたものが私の目の前に出てくる。ロックか。

ロックで押し通すつもりか。これが出せるなら花冷えも出せるだろ。いいけどさ、熱燗でも。
「……花冷え美味しいわー」
いつの間にか封獣もカウンター席につき、酒を嗜んでいた。厭らしい目でこちらを見ている。
「封獣、お前の懐から出てきたものが花冷えなわけ無いだろう。なんの強がりだよそれ」
だからといって、私に効くわけではない。もっと出会った初期だったらともかく、今更その程度じゃもう何とも思わねえよ。
「勘がいいわね、羨ましいわ」
「もうちょい頑張れよ。本当お前私のこと嫌いだな」
「全世界があなたの味方になっても、私は変わらず敵で居続けてあげる」
「これはある意味愛よ、愛。ねえ、正邪」
「殺し愛なんですけどねえ」
日本酒ロックをぐっと飲み干す。こう書くと盃を想像するが、持ち方は紅茶持ちだ。……気分出ねー。
けど、氷を入れたおかげで鬼殺しのきつい部分が柔らかくなっている。案外良いな、日本酒ロック。もう一杯いっとくか。
そう思ってコップをこいしの方に寄せようとすると、突然部屋のドアが開かれた。
「フランドール様ー、お客様ですよ。皆様一同様宛ですー」
果たして、そこにいたのはメイド長――
ではなく、妖精メイドだ。緑がかった薄青髪長髪、くすんだ赤目という人間だったら不自然極まりない自然の権化がそこにいる。
「はーいはい、通してちょうだい、シーア」
「かしこまりましたー」
「あれ、メイド長は休みなのか？」
「休みではありません。本日付けで貴女方の相手としてこのシーアが専属されたんですー」
「よほど嫌だったのかしら」

「何があったんだろーねー」
　封獣、こいし、お前らのそのセリフ聞いたらメイド長ブチ切れるぞ。さっさと思い出しとけ。
「あ、ちょっと待って。シーア、どんな奴が来たの？」
「薄桃の長袖に赤いシャツ、薄桃のスカートを着て、変な鉄板を背負っていました。あと変な錠前が胸に。変な河童みたいでしたよー」
「んー？　どこかで聞いたよーな」
「最後の一文なんだよ、どこで判断したんだよ」
「河童みたいでした」
　ゴリ押しやめろ。しかし、そいつが今回の客か。できれば常識人であってくれと願うが、ここに来る常識人はすでに狂気の沙汰だと気づいて諦める。
「それと鉄板に尻尾がついてましたー」
「奇抜なファッションねえ」
「正邪様クラスの邪気を感じました」
「なかなかの安心要素ね」
「それはどういう意味だ、おい」
「服の左右に出てる黄色い部分を引っ張ろうとしましたが色よい返事は帰って来ませんでした」
「ちゃんと返してくださいよぉ、その服」
「姉妹が一人いるらしいわね」
「か、かっこいい……」
「出身は妖怪の山と思われます！」
「『はーふ』らしいですが、『はーふ』ってなんですか？」
「だああっ！　わらわら集まるな妖精共っー！」
　いつの間にか私達は妖精メイドに囲まれていた。なにか面白そうなことがあると集まってくるのは、人間も妖精も変わりない。
　でもお前ら、仕事しろよ。お前らがここにいるってことは、多分今ごろその推定河童は迷い子と化してるぞ。そのことを伝える気はさらさらないけど。
「ちょっとみんな、お客様はどうしたの」

だってそういう常識はフランドールが突っ込むし。
「問題ありませんー、後ろから来てますのでー」
シーアと呼ばれた妖精メイドが得意げに答える。うん、目的は達成してる。けど仕事はしてない。わらわら移動する妖精メイドに付いて来てるだけだろ、それ。
「せっかくなので一杯ひっかけてから仕事に戻りますかー」
「言い方がおっさんじゃない」
「キッス・イン・ザ・ダークを一つ」
「名前でごまかすな」
「せっかく日本酒があるんですし、日本酒を頼みましょうよ。春暁をお願いします」
「はいはーい、じゃ、私はオレンジサキニー。後は頼むよ、メイド長」
次々とカクテルが注文されていく。三人の注文を皮切りに、メイド妖精たちまでがカクテルの名前を叫び始めた。それを一身に引き受け、カクテルを作る銀髪の人間。
……ん？　あれ、こいつ、十六夜？　十六夜咲夜か？　じゃあこいしは……隣りにいたわ。
「お待たせしました、こちら熱燗、春暁、オレンジサキニーです」
数秒もしないうちに、完璧にステアされたカクテルが出てくる。うん、この仕事の早さ、間違いないな。何やってんの、悪魔のメイド長。
「教えて差し上げましょうか。お客様をお連れするよう頼んだのにここで図々しくもキッス・イン・ザ・ダークなんて頼んでるそこのメイド妖精の前で」
そう話す彼女の瞳には、キッスどころかダーク・イン・ザ・ダークネスみたいなオーラが見える。ストップストップ。シーアがもう色失ってグレースケール状態だから、やめてやって。
だがメイド長は止まらず――かと思いきや、急に笑顔になり、メイド妖精たちの方を向いた。
大声ではなく、むしろいつも話しているような、しかしよく通る声で言う。
「こんにちは。今日は皆さんに、楽しんで頂きたいものがありまして」

その言葉に、メイド妖精たちが固まる。
「な、なんでしょうか、メイド長様？」
「われわれ、ここの掃除をしようと、思い立ち」
そう言い訳するメイド妖精たちには耳を貸さず、二の句を継ぐ。
「いつも頑張ってるみんなに、今日はねぎらいの意味を込めて、シルバー・ブレットを――」
今度はメイド妖精たちの顔が綻ぶ。早いよお前ら。まだアイツは言い終わってないぞ。
「――振る舞おうと思いましたが、あいにく今日は弾切れでして。ですので代わりに」
「みんな、伏せて」
フランドールが呟く。小さく、しかし強く。今まで何だかんだ長く一緒にいたせいか、一瞬で理解してしまった。これ、本気で危ないんじゃね？
その予想通り、咄嗟に身を屈めると同時にメイド長は言い放った。
「シルバー・ナイフでご勘弁下さいな」

おかえり　2

顔を上げると、すべてが終わっていた。
「メイド長の十六夜咲夜と申します。お見苦しいところをお見せしました、お客様」
最初に見たのは、頭を下げているメイド長。
次に、さっきメイド妖精たちがいたはずの空間。そこにはただ、ナイフ痕が残るだけだ。
「いえいえ、賑やかで大変良かったですよ。静かに飲むのは性に合わない」
「そうですか、ありがとうございます」
そして、薄桃色の長袖に赤い半袖シャツ、薄桃色のスカートを着て、狐の尻尾のようなものが出た鉄板を背負う背の高い妖怪。瞳が見えないほどに細長いその目からは、怪しさ、いや胡散臭さがにじみ出ている。手には春暁。
そして最も目を引く特徴は、その大きさ。
でかい。メイド長や封獣は見た目同じぐらいの年代と比べて背が高いのだが、こいつはそれにフラフープかけたぐらいデカい。百八十センチはあるんじゃないか。もはや違和感さえ出ている。
……違和感？　一体何のだ？
だがその正体を掴みきる前に、視界に錠前が入る。春暁を一気飲みするそいつの胸で輝く、大きな錠前。
鉄板。尻尾。胸に錠。まさかとは思うが、お前が？
「ああ、そうです。依頼人のみとりと申します」
その声は落ち着いていて、しかし明るさを感じさせた。だが、糸目と合わさるとどうしても胡散臭さが倍増する。こいつが依頼人だと？　帰っていいか？
「こいしさんは私を知ってるはずですが」
「えっ、私？」
私は胸をなでおろした。何だ、こいしの知り合いか。なら敵じゃなくてただの狂人だな。

だがこいしは首をひねる。おい、普通にごくごくオレンジサキニー飲んでんじゃねえよ。頭にジャックナイフ刺さってんぞ。
「……あ――っ！　地底の河童！」
そう叫んだこいしの頭から、血ではない何かが飛ぶ。ちょっ、誰か手当てして。これR―18Gじゃないんだよ。
「地底の河童？　そういえば聞いたことがあるわね。地底の奥深く、嫌われ者の嫌い者、全身真っ赤の河童がいるとか」
封獣が地味に失礼なことを言っているが、頭に肥後守が刺さったまま言われても心にこない。なんなら肥後守に彫ってある『謹製　多々良小傘』のほうが気になる。
「ええ、それが私です。どうもご期待には沿えなかったようですが」
みとりが薄桃のスカートをつまむ。まあ、真っ赤ではないな。
「そのほうが可愛いからいいわよ……っと」
フランドールが二人の頭のナイフを引き抜き、指を鳴らす。すると、ナイフは消え、代わりに手には救急箱が用意された。包帯を取り出し二人に分かれる。
「予告無しに刺しちゃルール違反よ、咲夜。次は無いわ」
問題はそこじゃないと思うんだけど。常識まで二分割されてないか、フランドール。
「申し訳ありません。ですが私は満足いたしました」
その傍らには逆説に無茶振りするつやつやの顔のメイド長。いや、主の妹が包帯巻いてるんだから手伝う素振りぐらい出せよ。
「私がやったら手が滑ってしまうかもしれませんので」
「メイドとしてどうなんだよ、それ。で、みとりとか言ったか」
私はみとりに指を突きつけた。
紅魔館に来る人妖は意外と多い。腕試しをはじめ、茶を飲みに来る奴、庭を見に来る奴、図書館に知識を求める奴。幻想郷の重要会議なんかもたまにここで行われるとか。
そんな中、こいつはなんと自己紹介した？　何のみとりだと？
――つまり、ここがどこなのか分かって来たのだ。ならば、聞かなければならない事がある。いつもと同じ質問だ。

「ここの事は、誰から聞いた？」
「えーっと、金髪で」
「寅丸かしら？」
「楽器持ってて」
「ルナサっちね」
「幻想郷転覆の準備を進めていた方から」
「正邪がもう一人!?」
「確定すんのやめろ」
「まあ紅魔館に被害がないなら構いませんわ」
　さすがはメイド長、主だけが絶対存在。いつもどおり目の前で人間が死んでも気にも留めなさそうなやつだな。
「ところで、どうしてそれを気になさるのですか？」
「ん？　ああ。宣伝の効果の程を聞きたくてな」
　前に、私は『クレカルをもっと知ってもらう』とかいう理由で宣伝戦争に巻き込まれたことがある。
　そんな名前の後始末だった気もするが、ともかくそれで名が売れたのは間違いない。だからどれぐらい広まってるか気になるのは当然だろう。それに聞く限り、割と広まってるみたいだし。
「嘘ね。素性を知って後で交渉材料にするつもりよ、こいつ」
　……まったく、よくわかってるじゃないか、封獣。やっぱ私はお前の事が大嫌いだ。
「封獣、私がどんな交渉をしようって言うんだ？」
「『おいおい、こんなのも解らないのか？　七曜魔女の友人が聞いて呆れるな。ああ、悲しむことはないぞ。お前と魔女は別々の妖怪、他人同士なんだから、なあ？』」
「……」
　目逸らし二人目。
　違うんだ。紅魔の王があんな打たれ弱いとか思ってなかったんだ。つーかお前らもメイド長弄り倒してただろ。同罪だろ。
「咲夜ちんがあんなに煽り耐性低いと思ってなかったや」
　まさかの同罪、同格、同類。なんつーか、お前らが私を引き込んだ

意味がちょっと分かっちまったよ、畜生。
「妹様、やはり私は飽き足りません。せめてあの帽子妖怪だけでも始末できませんか？」
「咲夜、あなたには先にやるべきことがあるわ。お姉様にさっきの金髪のことを伝えなさい。今の内に巻き込まないと、後で言われるわよ。『どうしてそんなに面白い事を放っておいたの？』ってね」
「……承知いたしました」
メイド長は非常に苦々しい顔でナイフを丁寧に折り畳み、それを投げ上げた。
何をしているんだ、と上を見ても、もうそこにナイフはない。そのまま下に視線をやれば、時既に遅し、メイド長の姿も消えてなくなっている。
自己申告だが、こういう些細なことには『時を止める程度の能力』は使わない、というのがメイド長の矜持らしい。私からしたら違いがわからんが。
「さて。これでいいわ、依頼を聞きましょう」
フランドールがカウンターを隅に押しやり、来客用のテーブルと椅子を引きずり出す。それ、最初にやることじゃね？
「金髪が根こそぎやられそうな……まぁ、いいですね。で、用件ですが」
そう言って一枚の絵を取り出す。青い髪に帽子をかぶり、胸に鍵を提げた少女。まるでみとりの逆をとったらこうなりました、みたいな格好をしている。
……おい、お前ら、重い。なんで私の上から絵を覗き込むんだよ。横空いてるだろ。
「河城にとり。こいつに私が見つからないようにしてください」
「探してくださいじゃねーのかよ」
「その程度でしたらあなた方には言いませんよ。『ナイツヘッド』さんに頼みます」
「くっ、やはり大手には勝てないというのか……！」
大手っつーか、ただの信頼度の差だと思うが。

「ところで、名前以外の特徴は？」
「ございますよ。明るく活発で金にうるさい。興味が湧いたら一直線、普段の居住区は妖怪の山。人情味厚く、しかし金は取る。最近の興味はもっぱらジェットパックで天狗並みのスピードを出すことに注がれている。縁起を見ればわかりますが、『水を操る程度の能力』を持っている。そのゲスさに似合わず、みんなでワイワイしながら発明品を作るほうが好き。あと――」
「……いや、もういい」
多いわ。ファンかお前は。
それはともかく、見つからないように、か。何とも微妙な依頼だ。
いや、感覚が麻痺している。本来依頼業ってこれだけ地味なはず。前みたいに一人のために館を襲撃したり一人で船を落としたり総員揃って花火でビラ配りしたりする方がおかしい。
つまり、ようやく私達が初のちゃんとした依頼稼業に就けたという方が正しいのだ。ここでミスれば二度とこんな平穏な依頼は来ない。なんとしてでも正解を導き出さねば……
……
……
あ、思いついた。
「つまりこいつをぶっ殺せばいいのか」
「正邪、ステイ」
フランドールが黒い杖をぎゅるりと伸ばし、私の腕に絡みつける。
「あだだだ！　なんだよ、最適解だろ！」
「……さすがにそれは。ああでも、ほんとにどうしようもなくなった時はそれで」
「いいの？」
「ええ、本当の本当に最終手段ですがね」
糸のような目が僅かに開かれる。そこにあるのは憂いの目……だったらまだ良いのにな。
ありゃ憤怒だ。怒りやら見下しやらが交じった視線がこちらに送られている。お前、マジにやったら許さねぇからな。そんな目だ。

「……くそっ。わーったよ、こっちで他の手を打つ。だから今日の所はお引き取れ」
「では引き受けてくださるんですね！」
「もっちろん！　楽しそうだもの！」
　こいし、逆にお前が楽しくない事柄って何？
「いいでしょう。妖怪の山。場所までわかってるから簡単よ」
　変なフラグを建てるな封獣。そう言って痛い目見たことは何度あった？
「一度も無いわよ。どんな時でもみんなと一緒だから楽しかっ……死ねぇ！」
　言葉を言い切るのを待たず、無情に封獣が振り下ろした炎剣レーヴァテイン。いや、それ誰でも使えんのかよ！
「ぎゃわあ！　削げる！　焦げる！」
「それではこちらの紙にサインを」
「ありがとうございます！」
「こっちガン無視!?」
　全くこちらの叫びに耳をかさず、みとりがペンを取り出す。そして字を書こうとする寸前、手を止める。
「あ、ついでにもうひとつ依頼していいですか？」
「？　問題ないわよ」
「こっち！　おい！　ヘルプ！　ヘルプミー！」
「はいよー！」
　こいしが封獣の上に乗ってコードで簀巻にする。
　レーヴァテインは鼻先で止まっている。あと数秒で今度こそ死ぬとこだった。
「依頼というのは――」
「ふう。助かった……」
「皆様にここで、全滅していただきたい」
　……あれ？　助かってない？

おかえり　4

うんまあ、逃がしたんだけど。

「ぜぇ……はぁ……」

いや、私も頑張ったんだ。ほんの僅かな魔力の残滓を辿るとかいう、全くやったことない事やったからな。それで二里ほど追跡したんだから、もっと褒めてもいい。貶してもいい。

もっともその魔力の残滓は、最終的に魔法の森に入っていたんだけど。

「お前……ふざけんなよ……」

悪態をついてみても、返事は行きて帰らず一方通行。憤懣を地面にぶつけてやろうかとも思ったが、そんな何も生まない行為をする元気ももうない。

魔法の森は、名前に恥じず魔力が満ち満ちていている。言うなれば魔力の海だ。そこに魔力の残滓などという小川が入ったのである。

砂漠の砂粒というやつだ。端的に言って、無理。

「……」

それでも一応、何か手がかりを残していないかあたりを探ってみた。

けど、無駄。

春が近づき、蕾を大きく膨らませて今にも咲かんとする桜に無性に苛ついただけに終わった。

「……帰るか」

よく思い出してみれば、あいつはこいしや封獣が知ってる程度の有名人なわけで。どこに行くかぐらい、あいつらに聞けば多分わかるだろう。結果論ながら無駄足だよちくしょうめ。

そんな毒づきを心に浮かばせながら、私はふらふらと帰路についた。

「おや？　いつの間に外に出たんですか、正邪さん」

紅魔館に帰り着くと、いつもと変わらず門番が出迎えてくる。今は

その笑顔すらもなんかうっとうしいが、それでもここを通らないといけない。
紅魔館には門がある。そりゃ、門番がいるから当たり前だろう、というところだが、問題はここ以外から紅魔館には入れないということだ。
ぱっと見、門の上には何も無く、飛べば通過できそうだがそれは見かけだけ。実は何者も通さないバリアが張られている。
このバリアを外から通過できるのは、とある通行証を持つもののみ。つまりは紅魔館の面々だけだ。私のような客人は外に出るたびに門を通らねばならない。まったく、誰に対する仕掛けなんだか。面倒も極まったもんだ。
ちなみに中から外へは利便性を保つためとかなんとかで誰でも通れる。もともとは外の世界で普及している『オートロック』という術らしい。知らない内に外の世界は魔法に支配されちまったのか？
ま、どうでもいいか。
そういや、あの河童もここ通ったはずなんだよな。ああいうのはお前の時点で止めるものじゃねーのか、おい。
「お前の不始末を消しに行ってたのさ。燃え広がっちまったがよ」
「えっ！　不始末？　わ、私また寝ている間に誰かふっ飛ばしたんですか……？」
そっちじゃない。お前職務中に寝てるのかとか、寝てる時でも門番できんのかよとか言いたいことはあるが、とにかくそっちではない。
「あんたが通した河童がいただろう？　そいつが私等に向かって攻撃してきたんだよ。まったく、門番なら敵と味方の区別ぐらいつけてくれ」
私がそう言い放つと、彼女は頭に疑問符を浮かべたような顔をした。おいおい、しっかりしてくれ。
「河童？　今日はあなたがた以外、誰も通していないのですが」
「あんたが通さなきゃどっから入るんだよ。幻だったとでも言うつもりか？　現に私も、妹様もダメージを受けてるのによ」
「……フランドール様が？」

私がフランドールのことを言うと、門番は急に怪訝な顔をした。
まあ、気持ちはわかるけど。あのどう見た感じでも最強生物の妹様がダメージを食らうだなんて、レミリアがプリンを嫌いになるくらいありえないことだ。
「けどな、信じられなくても事実だぜ？　私はこれからもう一度部屋に戻るが、お前もついてくるか？　自分の目で見りゃ納得いくだろう」
「ふーむ……」
門番は下を向いて考えこんだ。十秒。二そしてゼロ秒後、門番の周りに無数のナイフが出現した。とっさに布を取り出して回避。
「のわわ!?」
「うおっ！　危な！」
ひらり布。身に纏えば弾幕の方から避けてくれる使い勝手のいい道具だ。
しかも避けるのは弾幕だけではなく、視線なども一緒に避けられるので逃げるのにぴったり。異変を起こす前から持っていたというのもあって、少しばかり愛着が湧いている。おかげで使用回数はダントツの一位だ。
私の持つアイテムの中で唯一、なぜか劣化していないからというのもあるが。
「っ……ふー。おいメイド長！　こいつを罰するのは自由だがよ、客人まで巻き込むのはどうかと思うぞ！」
ナイフがぶつかり合う金属音が聞こえなくなるのを見計らい、布の下から外を覗く。
そこにいたのは案の定、さっきも会ったばかりのメイド長。
「あら、ごめんなさい。あなたにかまう暇もなかったもので。ええ。美鈴？」
「……ふーっ……！」
私の隣にはナイフでハリネズミになった門番が、ではなくナイフを全て受け止めた門番が。
でも両手両足脇太腿手首足首まで使ってるあたり、かなり全力だっ

たっぽい。あってよかったひらり布。私だけだったら多分ミンチだよこれ。
「あの……これどうにか……」
「ええ。わかってるわ」
　メイド長が指をパチリと鳴らすと、そこら一帯のすべてのナイフが消える。明らかに一人が持てる量じゃないが、わざわざ紅魔館から持ってきてんのか。まさかな。
「で、美鈴。どうして侵入者がいるのかしら？」
「私らと一緒にあいつを歓待してた奴のセリフか、それ」
「誤解よ。ちょうどそろそろ修練の時間だから、そのついでに聞きに来ただけ」
「門番も驚いてたんですがそれは」
「あなたが急に目の前から消えたからじゃないかしら？」
　時間軸を混ぜっ返すな。布被る前から驚いてたっつの。
「今日は誰も侵入していません。おそらく別の方向から来たのではないかと」

池塘春草の夢

その世に生まれついた瞬間、少女は全ての記憶を叩き込まれた。

この世界がなんのためにあるのか、ここは一体どんなところなのか、生きるためには何をすればいいのか、――どうしてこんな知識を持たされたのか。

紙束の中に埋もれて物心つかされた少女は、幼ながらにしてそれらの記憶を使いこなした。才能ではない。頼れる者がいないゆえの、生き残るための本能だった。

少女の記憶は伝えていた。

この世界には魔界という名がある。いわゆる魔族たちが闊歩する、力と血筋だけが重視される世界だ。

少女の両親は、二人ともどもその両方を持っていなかった。魔界にとって価値があるわけでもなく、ただ消えていくだけの下級の悪魔だった。

そのままであったならば、少女を産むことなく、血筋をそこで断つつもりだったらしい。それは少女にも少し分かった。生まれてくる子供が、親のせいで不幸を被るなど、二人には耐えがたかったのだろう。

記憶には実に色々なものがあった。

魔族達の種類による弱点、魔界に存在する無数の魔法、無限の魔術、それに対抗するための力の付け方。

世界が力で動いている以上、逆に考えれば力さえあればすべて黙らせられる。しかし、魔界において力はすなわち血筋。血によって受け継いできた魔法や魔術が力の元になっている。

魔界では、生まれながらにしてすべては決まっているのだ。それは魔界のある種の『ルール』だった。

だが、何も持っていなかったはずの両親は、ただ一つ、『幸運』だけは持っていたらしい。

悩みながらも細々と二人幸せに暮らしていた、そんなある日のこと。

母親が突然、姿を消した。
当然、父親は大いに狼狽えた。昨日の俺になにか不備があったのか、うっかりどこかで迷子になっているのか、それとも、ついに――。
魔界は実にシンプルだ。力が無ければ疎まれ、蔑まれ、上位魔族の恨み辛みのはけ口にされることすらある。彼が想像したのは、そのうちの最悪のパターン。
父親は、たまらず家を飛び出した。魔界中を虱潰しに探しに行った。彼は悪魔でありながら空すら飛べなかったので、己の脚だけを頼りに、ただ走った。
二、三日魔界を駆けずり回り、もしかするともう家に帰ってきているのかもしれないと、淡い希望を胸に戻ってきた父親は、机の上に一通の手紙を見つけた。
疲れでぼんやりしながら手紙を開いた父親の目に飛び込んだのは、見慣れた筆致の文字。
『私から』
そんなルールが定まっている以上、上位魔族に対し下位魔族は反乱を起こすことすらできなかった。
叛意を持てばすり潰され、罠を作れば逆に落とされ、団結すればまとめて荼毘に付される。そもそも団結して勝てるのは単体の人間を相手にした場合で、単体で頭も切れ、身体も強い上位悪魔たちの前では、団結に何の意味も無い。
そして、それを教えてくれる指導者も居ない。魔界は最早、どうしようもないほどに腐り果てていた。
『勝手にいなくなってごめんなさい。今、私は外の世界にいます。名前で集めるなんてとっても不思議な召喚通知があったから、無くなる前にって思って取っちゃった。貴方はきっと私を責めるでしょう。下級悪魔が呼び出されるのはどういう時か、お前は忘れたのか、って。確かに、軽率だったのは謝ります。でも、心配しないで。こんなふうに手紙が書けるくらいに、ここはとっても居心地の良いところでした。それに、貴方が好きそうな物もいっぱいありました。貴方と一緒に来れなかったのが残念です。いつそっちに戻ることになるかわか

らないので、一緒に写しを送ります。きっとこれが、あなたの助けになりますように』

力では勝てない。

言論には、教養が足りない。

衣も食も住も魔法で事足りるため、ストライキにも意味はない。

ただ、見世物や奴隷にはされていない。下級悪魔が持っているのは自由だけ。彼らにとって、上級悪魔は自然災害のようなもの。上級悪魔にとっては、下級悪魔はそこにいるだけの虫ケラ。

反抗しても意味はない。

反対しても意義はない。

一緒に送られてきたのは、魔導書だった。

父親は元来、学ぶのが好きだった。自由は余るほど持っている下級悪魔には、研究の時間もいくらでもあった。無論、いくら学んだところで脈々と継がれた魔法や魔術に勝つことなど出来はしない。それでもただ学ぶ。学ぶためだけに学ぶ。父親は紛れもなく研究に身を捧げた悪魔だった。

当然父親は、それをめくった。

『だからお前は作られたんだよ、夢幻』

或る天の片翼の話

私は元々、ただの召使いだった。
天の決定に従い、あの方の下につき、同僚の召使いたちと共に色恋の話に花を咲かせるような、そんな普通の召使いだった。
私はその生き方に疑問を持ったことはなく、また不満もなかった。あの方は召使いにも平等に接する御方だったし、……私があの方のことを純粋に好きだったというのもある。
私はそれでよかったのだ。それ以上のことなど望んではならなかった。だが私は、あの方の優しさに、勘を違えてしまった。
その頃にはあの方も妻を迎え、幸せそうにしていたというのに。私は思い上がりも甚だしく、こう考えてしまった。
召使いとしてではなく、一人の女として見て欲しいと。
せめて、その思いをそのままあの方にぶつけられるほど、私が素直であれば。
あるいは、あんな未来は、無かったのかもしれない――

「……？」
顔を上げる。どうやら寝てしまっていたらしい。歳をとるとどこでも寝られるようになってしまって困る。だがさすがに崖の上に腰掛けて寝るのはまずいだろう。後で対策を考えよう。
……いや、私は対策など煩わしいことから逃げるためにここに来たんだった。
この月都郊外――静かの海に。
「……ふぅ」
目をこすって、眼前の巨大な穴を見る。音も生き物も色もない世界に、ぽっかりと開いた大きな穴。その淵の崖に私は座っていた。
都の結界の中から見るのとは全く違う、水すら湛えない空っぽの海。あまりにも殺風景だ。明らかに鑑賞には向いていない。

それゆえ、他の者達も好き好んでここへは来ない。（たまに妖精がいるせい、というのもあるが）考え事をするのには最適の場所、というわけだ。

けれど、私は考え事をするためにここに来たわけではなかった。むしろ考えないためだ。

月の都に召されてから幾度となく、私は視線に晒されていた。

その目の殆どは冷ややかだった。当然だ。神の召使いがたまたま一度反乱分子を探り出した程度で、都の中心近くに住むことを許可されたのだから。

実は中心近くに住んでいるのはまた別の理由なのだが、それは言ってはいけない事なのだろう。下手に手を打てば地上に追放されかねない。それほどに今の私の立場は危ういのだ。

とにかく、視線だらけの月の都の中に居たくはない。かといって、地上に行くことは都が許さない。どうしようもなく私は、ここへ来た。逃げて来たのだ。

「……」

思わず顔を伏せた。また寝てしまうのではないかと危惧する。だが、今は寧ろ眠りたかった。

あの方なら、今の私を見てなんと思うだろうか？

私はあの時、どうすれば良かったのだろうか？

せめて夢でもいい。あの方に会って、答えが欲しかった。

そう考え、目を瞑る。十秒。二十秒。三十秒。

ふわりと体が浮くような感覚と共に、四肢から力が抜けてゆく。

そして思考が鈍り、意識は夢の世界へと誘われる。

眠りに落ち行く中、私は自然と口が動いていた。

「――稚彦様……」

そして、世界は黒に塗りつぶされた。

しかし、私が夢を見ることは無かった。

理由は単純。叩き起されたのだ。けたたましい、爆発のような音に。
「ふわぁ!?　な、何!?」
私は素早く立ち上がり、音のしたほうを見た。
場所はすぐに分かった。崖下向こう、静かの海の真ん中近く。音のした箇所には、ちょうど土煙がもうもうと上がっていた。
「え……？　何事？」
崖の上から様子を見る。土煙が巻き上がった高さは、ざっと七メートルかそこらだろう。かなりの威力だ。
あれほどの煙をあげるような出来事となると……すぐに思いつくのは、兎たちの訓練だ。
最近兎たちの戦闘技術を上げるため、綿月家のご息女が色々と無茶をしているという話を聞いたことがある。もしかしたら、あれもその一環かもしれない。
しかし、私はその説をすぐに否定した。
いくら何でも、七メートルの土煙が上がる訓練は、下手すれば死に至るだろう。死は穢れを呼び込む。
いくら綿月家が穢れを祓えても、あんなに派手にやるのは月夜見様がお許しにならないはずだ。
ならば無法者の修行か？　いやいや、ここは月の都にかなり近い。無法者の頭が余程の無法地帯でもない限り、すぐに捕まる場所は選ばないだろう。
となると、まず私がやるべきは。
「……土煙は、一秒と経たず土に戻った」
私の言葉のとおりに、土煙は収まり、その中にあったものを露わにした。
やるべき事。それは、真相を探ることだ。
私は月の都が嫌いだ。たとえどれだけ平和でも――誰も口を滑らさずとはいえ――自分に向かって好奇の視線が飛び交う様な都など、聖人でもなければ愛する事は出来ないだろう。
もちろん私にはできない。できない、けれど。

私もそんな都の住人だ。
私の唯一の帰る場所なのだ。
いくら嫌っていても、その場所を脅かすようなものは許しはしない。
だからこそ、ここで正体を暴き、都の危機を未然に防ぐ。そう、決して野次馬根性などではない。
……決して楽しそうだからなんて理由ではない。誰ともなく私は心の中で言い訳し、目を凝らす。
「さて、一体どんな輩かしら――!?」
そして、目を疑った。
その中にあったものは、人の形をしていた。ただし、どう見ても月の住人ではない。
ところどころ擦り切れた、粗末な布の服。
月の民ならありえないほどの出血と、大量の傷。
そして――頭頂に立つ、小さな二本の角。
地上の妖怪が、血塗れで月に倒れていた。

或る日の変革の話

「……」

冷や汗だらだら。思考は真っ白。歩く姿は傀儡人形。

けれど私は考えていた。

現在、私はとりあえずあの来訪者に近づいている。

自慢じゃないが、私は目がいい。召使い時代に遠くを飛んでいる鳥の種類を言い当てたこともある。

だからこそ、見間違いようもなかった。黒いぼさぼさに所々白色の束が交じった髪。その髪に交じって、彼の頭に二つの鋭い出っ張りがあることを。

月の都の民は数いれど、その殆どは兎、神、もしくはそれに近しい者達だ。角の生えた者など噂にすら聞いたことがない。

つまり、目の前で倒れているあの者は間違いなく侵略者――地上人なのだ。本来なら月の都に通報し、しかるべき処断を受けさせなければならない。

そう、頭では理解している。わざわざ穢れる危険を犯してまで近づく必要などないことに。理解しているのだ、が。

「……えーっと、生きてる、の？」

私は近くに座り込み、地上人に話しかけた。

「……」

「それとも、寝てるだけ？」

「……」

返事がない。もしかして、手遅れだった？

「……おーい、もう朝だよー」

「……ヒュー」

「！」

返事はないが、息の音が聞こえた。

間違いない。彼はまだ生きている。

――だからといって、どうするべきかはまったく検討もつかないが。

月に来た地上人の措置はいくつかある。一応正式には月の都に届け出するよう言われてはいるが、その手続きは案外めんどくさい。
なので即断で殺害したり、デモンストレーション用に使ったり、様子を見てどこまで気づくか地上を試したりする。
だが、最もポピュラーな方法は、綿月家に頼んで地上に送り返すことだ。
地上の民は穢れをふんだんに含むため、迂闊に接触するのは少々まずい。
だから穢れを祓える神降ろしの能力と、月と地上をつなぐ能力の二つを持つ綿月の家に頼み、地上の民が穢れを振りまく前に地上にさっさと送り返す。それが穢れを嫌う大多数の月人の選択だ。
もちろん私もそうした。これで明日も平和だ。

私もそうしただろう。純粋な月人だったならば、だが。
そう、私は純粋な月人ではない。ハーフ、というわけでもないが、月の神と地上の神の間、微妙なところに私はいる。それも私に対する視線の原因の一つだ。
要はほかの月人よりも地上に近い存在のため、ついつい地上に肩入れしてしまう。私の悪い癖だ。
しかし、分かっていて直せるならそれは癖ではない。現にこうやって地上人に話しかけているのが何よりの証拠である。
それでも、話しかけるだけで済むならただの癖でいいのだが。もしも私が今からやることを月人の誰かが知れば、処刑待ったなしである。
……大丈夫だよね？
「えっと、動けるかな？」
「……」
「いや、無理か。ならやっぱりどこかで体力を回復させないとだけど……」
私は辺りを見回した。助けを求めるためではなく、周囲に誰もいな

いことを確認する。
「……しょうがないかなあ。カモン！　ドレ……あだっ！」
「気安く呼ばないでください。友人ですか貴女は」
叫ぼうとした私の鼻に、分厚い本がヒットする。どこからともなく現れた彼女は、本を片手に、いつもと変わらない目で私を見つめていた。
「うう、でも私が頼れるのなんてあなたくらいだもの」
鼻を押さえながら彼女を見つめる。
突然その場所に現れた彼女。名をドレミー・スイートという。私がこの月に来る時にお世話になった妖怪だ。
さすがに神と言えど月まで飛ぶのは難しいだろうと、月の都が派遣した立派な公認の妖怪である。
だから立場は私の方が上ではあるのだが、この妖怪、まったく私を敬わない。だからこそ友人なのだが。
月に向かう最中に話しかけたら、案外面白い妖怪だったので、今では私の一番の友人だ。
え？　二番目？　……秘密だ。
「月人の友人を作ってください。私は忙しいんです」
「神コミュニティでもハブられる私にどうしろと」
「そこで引くからダメなんですよ。貴女は自分の名も忘れたのですか。で、何の用ですか」
「もう少し優しくならないの、貴女。用件はね、うん、えーっと」
そこまで言って、詰まった。
わりと考え無しに呼んだが、彼女は月の公認妖怪だ。月と近しい考え――例えば、地上人の粛清などを考えていてもおかしくはない。そうだったら私の考えていることは実行できない。
……どうしよう。
「はっきり言って下さい。言いにくいとか言われても知りません」
けれどドレミーは待たない。足を踏み鳴らしながらまっすぐこちらを見つめてくる。まるでこちらを見透かすように。
「うううう、そこの子を……」

私は早々に折れて、地上人を指さした。
「は？　……え？　こいつ……」
「そこの子を――」
「助けて、欲しいの」

或る苦労の話

「本当に、助けるつもりですか？」
「ええ、勿論」
ドレミーはめずらしく頭を抱えていた。
実は、私がこうやってドレミーに大きな頼み事をするのが今回が初めてなのだ。
今までは話し相手になって欲しいとか、一緒に買い物行こうとかその程度だった。
だが、今回は事情が違う。地上人を助けてくれ、という重大で、そして切実な願いだ。動揺もするだろう。
「……貴女は、今の立場を理解しているのですか？　貴女はもう月の神です。こいつを、……地上の民を、助けるのは重罪ですよ。――稀神サグメ様」
分かっている。私はもう、あの方に仕えていた頃の私ではない。地上にいた頃のように後ろ盾はもう居ないのだ。勝手に地上に干渉すれば大罪、下手すれば都への反逆罪にもなりかねない。
けれど私は、私だ。どれだけ月に居続けても、月夜見様に心服しても、名を変えても、この本質だけは譲れなかった。
――私は、目の前で困っている者を助けずにはいられない。
たとえどんな犠牲を払っても。
それが稀神サグメという神なのだから。
「賢明な貴女ならもう理解しているはずだ。月は馬鹿じゃない。地上人が月にいれば否応なしにすぐに感づきます。そのリスクを負ってまでこいつを助ける必要など――」
だから私は最終手段を出した。あまりにも簡単で、最低の手段を。
「その上で私は言っているのよ。あまり言いたくないけど……助けなさい、ドレミー」
「……了解しました」
ドレミーは苦笑して、地上人を抱え上げた。
ああ、絶対にやるまいと思っていたのに。ついにドレミーに強制権

を使ってしまった。
かたや妖怪、かたや月の女神。立場は私の方が上である以上、こうして頼み事は強制することが出来る。
だが、私はドレミーと友人でありたいのだ。こんな従者とお嬢様みたいな関係は嫌いだ。だからやらないように気をつけていたのに。ああ。
「そんなに悲痛な面持ちでいないでください。こいつが目覚めた時に、そんな貴女の顔を最初に見せるつもりですか」
いつの間にか考えが顔に出ていたらしく、それをドレミーにたしなめられてしまう。
怒った顔のドレミー。普段から彼女の表情は読みづらいが、この時ばかりははっきりわかった。
落ち込んでいる場合ではなかった。うっかりドレミーに気まで使わせてしまった。申し訳ない。
「……そうね。ごめんなさい、ドレミー」
「謝れとは言っていませんがね。こういう時は感謝でよろしいのです」
「……ありがとう」
「ええ、どういたしまして」
そう言って、ドレミーは元の顔に戻った。
ぶっきらぼうで、半分目が閉じた顔。誰かを敬うことなど無さそうないつもの顔だ。
けれど私にはその顔にどことなく笑みが浮かんでいるように見えた。もしかしたら後ろめたさが見せた夢かもしれないけれど。
「さあ、時間がありません。助けるなら一刻も早くしないと、この方は死にます」
「ええ、急ぎましょう!」
そうして、私たちは駆けていった。

「それで、どこに連れていくの?」

「それを考えずに私を呼んだんですか？　私はただの妖怪なんですが」
「わりと何でもできるんだもの、あなた」
「主な商談相手は月ですからね。色々できないと生き残れません。怪我人一人に呼ばれるとは思ってませんでしたが」
そんな話をしながら、足早に急ぐ。先導はドレミー。
地上人を抱えている以上、月の都には入れない。
仮にバレないように入ろうとも、都の入口には穢れ探知の木『優曇華』が植えられている。
これは穢れを養分にして成長する木であり、これを見張る番兵により、月の都内の僅かな穢れを測定し、同時に祓っている。また、穢れの塊である地上人が都に入れば一気に成長するため、都内の浄化と同時に侵入者発見にも役立つという画期的システムだ。
もっとも、月の都は優曇華が育つ前に自分で侵入者に気づく者の方が多いため、優曇華の見張りは閑職の一つに数えられているとか。
それでも植えられている理由は、この木がいかなる隠蔽も貫通して穢れを感知する事が出来るからだ。月の民がいくら穢れを隠しても、優曇華は容赦なく成長する。つまるところ私のように、情にほだされ地上人を助ける者を発見することに特化した警報装置である。
この木を誤魔化せるのなんて、穢れを祓える綿月家や思兼ぐらいのものだ。だから本来なら地上人を助ける事など不可能である。
だが、こちらには夢妖怪のドレミーがいる。今まで月の無茶振り（月夜見様のために穢れなき最高級の衣服を、とか地上の視察を穢れなしに行いたいとか、穢れないすべらない話とか）をこなしてきたドレミーなら、出来ないことは無い。……と思って呼んだ。
「……まさかとは思いますが、呼べば何とかしてくれると思って呼んだんじゃないですよね？」
「え？　え、ええ！　考えてたわよ！」
危ない危ない、心を読まれるところだった。ドレミーは時々こうして心を読んだようなことを言うから困る。ドレミーに言わせれば『貴女の表情が読み易すぎるだけです』らしいが、そんなに表情豊かだっ

ただろうか、私。
「ならいいんですがね。さて、着きました」
などと考えていると、突然ドレミーが立ち止まった。ぶつからないように慌てて体を止める。
「もふぅ」
「何やってるんですか」
ストップ失敗。顔がドレミーの服のポンポンに埋まった。
月の都の建物は殆どが見た目重視で出来ている。それは都の精神性を重視する風潮が大きいことや、自分で作れるから独自性を出したいと言った部分の現れだろう。

突発

「最近な、白髪が増えたと思うんだ」
「……何よ、突然」
少しずつ暑くなる前の、束の間の休息を味わう初夏の朝。今日も幻想郷は騒がしい。
まあ、紅魔館が半壊したのが昨日の今日なので、無理もないけれど。そのせいか人里では文々。新聞が珍しく飛ぶように売れていて、思わずそのうちの何割がキャンプファイアーの燃料になるか計算したくなったほどだ。私の予想では十割。
そんな中、ここ魔法の森はいつもと同じ静寂を保っていた。私も、隣に居る封獣ぬえも静かなのが好きだから、紅魔館に着くまでの僅かな間と言えど、音の少ない場所ってのはありがたい。
というわけで、冒頭に戻る。
「いやさ、私の髪の毛って見てのとおり、黒と白と赤なわけじゃん」
「そうね」
「で、私の地毛は黒なのよ」
「意外ね。もっと全面赤の髪を黒染めしてるのかと」
「この前髪は天邪鬼だと勝手にこうなるんだ。好きで赤してるわけじゃない。」
「あら、そう？似合ってるのに、その前髪」
「……ふん。でな、黒と赤はこうして説明がつくんだよ」
「うんうん。白に覚えはないと」
「そう、それ。白なんて天邪鬼から最も遠いイメージじゃねーか。なんで生えてるんだか。」
「それも地毛だったのね。染め分けてるのかと思ってたわ」
「染めたら髪にダメージが入るじゃないか。艶のない髪は嫌だ」
「変なとこだけ乙女ね、貴女」
「うっせ。それでな、それが最近増えたんだ。」
「ストレスでしょ？」
「それだったら今頃私はスキンヘッドだっつの。原因不明なんだ

よ。一日千本単位で増えてる気がすっから怖くてな」
「そう？そんな風には見えないけど」
「近い近い。頭を見ろ、頭を」
「見てるわよ。そうね、言われてみれば白の毛束が増えたかな？あと枝毛」
「それは関係ねーよ。……いだだだ！無理やり梳こうとすんな！」
「ゴワゴワじゃない。床屋行きなさいよ」
「冗談じゃねえ。あんな無防備なとこ行けっかよ。それ行くぐらいなら自分で切る。」
「ゴワゴワも髪へのダメージだっていうのに。私が切ってあげよっか？」
「それこそ無いわ。首ごと持っていくだろお前」
「隙を見せたら、そりゃ殺るわよ」
「無茶言うな。じゃなくて、白髪だよ白髪」
「原因不明の白髪ねえ」
「私も私なりに調べはしたんだよ。白髪になる病気とか、祟りとか」
「普通に老化って可能性を考えないのね。」
「いくら私が人間に近くても、そりゃないだろ。普通髪より先に身体が成長するもんだ」
「成長？」
「どこ見てんだテメェ。」
「あら、どこを見てると思ったのかしら？」
「ったく……とにかく、なんか白髪になる原因に心当たりねえか？うっかり私に呪いをかけたとか」
「だったら髪より先に腕が砕けるはずなんだけど。」
「思ったよりハードなのやってんじゃねえよ」
「明日で七日目よ」
「今日を最終日にしろ。じゃなくて原因な」
「楽しかったのに。そうね、その白は地毛なのよね？」
「たりめーだ。いつから生えてるかは知らんが、地毛にゃ間違いねえ。」

「え？」
「うん？」
「生まれた時からじゃないの？」
「いや、私生まれや育ちの記憶薄いし。じっくり水面見る機会もなかったしな。」
「じゃあなんで地毛って知ってるのよ、誰かが染めたかも知れないのに」
「決まってんだろ、そりゃ――あれ？」
「？」
「……何でだっけ？地毛なのは間違いないんだが」
「ちょっと、しっかりしなさいよ。無知の知気取り？」
「ありゃそういう意味じゃねーっての。けど思い出せねぇな、うーん」
「もう。あ、着いたわよ、紅魔館」
「もう着いたのか。話してると一瞬だな」
「相対性理論によると、一瞬で時間が過ぎ去るのは貴女がそれを楽しんでいるかららしいわよ」
「そうかい。次にひっくり返す物はそれにするわ」
「楽しいことぐらい認めればいいのに」
「私ァ天邪鬼なのさ」

「……私と一緒の時は、一つだって嘘つかないくせに」
「あん？どうした封獣、立ち止まって。お前も記憶喪失か？」
「違うわよ。ほら、ぼさっと立ってないでさっさと行くわよ」
「お前が立ち止まったんだろうが……」

わた、！しのでき?!。^^^^^

わたし　古明地こいし！
みんなから　こいしって　よばれて　いるの。
え？　どうしたの　正邪ちゃん。　誰に　自己紹介　しているかだって？
きまってるじゃない、私たちの――ｆｖｘｇ．ｕｃｊｋｌｍ――
あれ？　何だっけ？

私の名前は古明地こいし。しがないただのハンターだ。
といっても、宝石や札束やらを狙うさもしい盗賊共ではない。生のため生を狩る、れっきとした狩人なり。
今日も地霊殿で獲物を狩っている。正直獣肉には飽きてきたが、これも生きるためだ。これも運命だ。
時。選択。あの人たちはどこの虚空か？　もたらされし幸福は一片の雪よりも美しい。
込められた弾丸は誤たず、眉間を撃ち抜いた。今日は猫鍋だ。

９９９。７７７。君は、２４４２の真実を知るか？
欲しがっていたものはただの岩塊だと知った時、本当が見える。聞くな。下ろすな。見据えろ。罪は我が４４４より生まれいづる。さあおいで、こっちの水は甘いぞ、古明地　　、はにをせ、のも、けて！

――ふう。

「やっぱ、久しぶりにやると疲れるなあ……」

地霊殿の一角、誰もいないのにいつも綺麗な部屋。地上ならまず七不思議確定だけれど、生憎この世界、そんな程度では不思議のふにもならない。せいぜい誰もいないからキレイなんだろ、と返されるのがオチだ。

もっとも、この綺麗な部屋は、部屋の主が帰ってこない時でもちゃんとペットたちが掃除をしているからだけれど。ありがとう、ハシビさん。

さて、誰もいないこの部屋でただ一人たたずむ、ふわふわとした人影。別名この綺麗な世界の主。別名できる妹。要するに私だ。

さてさて、人影と化した私はそのままベッドに倒れ込んだ。人前ではテンション高く話す私だが、こうしてひとりでいる時はスイッチも切れるものだ。たまにはこういう時間は必要だもの。

あ、話すのが嫌いなわけじゃないよ？　オンとオフは切り替えるのが私流。それはともかく、というより今はそれとは関係無く疲れたんだけれど。理由は明白で話す必要も無いけれど、敢えて記しておく。

私の能力が『無意識を操る程度の能力』であることは皆知っていることだろう。無意識下に制御された肉体を意のままに操る、いわば全人類への操り糸……ということにしている能力のことだ。

というのも、実はこれ、私以外にはほとんど効かない。正確に言うなら、自分以外の無意識は操れない。欠陥もいいところだがリコールは受け付けてくれない。いくら目を閉じた時の副産物だからといって、あまりにもサポートが悪すぎやしない？　やはり幻想郷にもろくな神はいないようね。

話しを戻すと、この能力は私が人里とかを徘徊するぐらいにしか使えない、表記だけの一能力<<システム>>なのだ。正直びみょい。せっかく歴史に二人といない閉じた恋の瞳持ちなのに。一体私が何をやらかしたんだか。前世ぐらいしか思い当たることはないのになあ。

けれど、この能力にも一応使い道はある。やると意識が飛びかけるほど無茶苦茶なので、もし私みたいな覚がもう一人出てきたら、全力で止めるに違いないけれど。もちろんお姉ちゃんが便利だからと使いだしたりしたら、聞いた瞬間竹林の医者に叩き込むと思う。

その使い道について話す前に、『集合的無意識』

バスケ

地底。
そこは人類がロマンを求めた場所の一つである。
天空、大海、地底。とかく自らが敵わない大きなものに人間はロマンを感じ易い。
今、その地底で行われてようとしているのは、熱き戦い。
古代人が求めてやまなかった、その熱き戦いが、始まろうとしていた。

「ストライ～ッ！バッターアウトォ！」
地底に審判の元気な声が鳴り響く。あれほど元気でも地底に来た以上は今日が命日になるかもしれない。そう思うと合掌でもしたくなるが、生憎こっちは手の離せない状況である。物理的に。
「さあ始球式が終わりました。今宵この地霊ホールはどのようなドラマを見せてくれるのでしょうか。解説は私、古明地こいしと、」
「ついさっき簀巻きにされて連れてこられた鬼人正邪だ。とりあえずカメラ止めろ、こいつ殴るから。あとなんでバスケで始球式してんだ。」
「はい、怒涛のツッコミありがとうございました。応募頂いた事項は後でシュレッダーの耐久テストにリサイクルします。それでは選手入場です。」
「まって、話がｌｎｍも見えてこないんだけど」
このとおり、文字通り手も足も出ない状態より自己紹介だ。私の名前は鬼人正邪。しがないただの天邪鬼である。本当は色々とやったから『ただの』というのは大きな間違いだが、今はそんなことは些細なことだ。何をやっても本当のピンチの時は過去など意味を成さないのだから。
しかしてその天邪鬼がなぜここにいるのかというと、私が教えてほしい。起きた。歯を磨いた。飯を食べた。森を散歩した。気づけば簀巻きになった。一体この一連の動作のどこに落ち度があったのか。

あぁそろそろ端午の節句だしなとか呑気な思考が頭を過る。「いや、太巻きを作るなら節分の方が良いでしょ」そんな対抗意見も出てきたがどちらも食べられるのは私だから変わらな待て待て、こいしてめえ割り込んでんじゃねーぞ。

「さあ、選手入場も済みまして、これより開会式を始めます。一同、ご起立ください」

「全員既に立ってるんだけど」

「礼」

そのアナウンスとともに選手達が礼をする。ただし方向はまちまちである。お前ら何してんだ。協調性ゼロか。

「礼…霊……博麗霊夢……うわぁぁぁ！」

しかも一名発狂した。一体何があったんだろうあの天人。

落ち着いて全体を見てみると、妙に豪華な面子だった。ざっと見ただけでも、紅白と黒白はもちろん、スキマや狼女、三つ足、バイオリン、屋台女、バカ妖精、五つ目、ゾンビ、高兎、九尾、古明地こいしと無駄に多い。……ん？

「では校長先生より、式辞の挨拶です。比那名居天子は担架です」

「どっちだよそれ。後なんか選手にお前が見える気がするんだけど」

「そいつに尻尾が見えれば私だよ」

逆だろ。そう突っ込むのも面倒だが、面倒でも容赦なく校長の話は始まる。

そういや誰だよ校長って。こいつらをまとめあげる奴がいるというのか。明らかに何癖もある連中が集まっているのに、こいつらは何故か暴れだしていない。スキマとあの桃ばっか食べてる女とか、もう一歩で爆発しそうなんだが。これを抑えてまとめあげるとか、一体どんなやつが首領なのか。見つけた瞬間腹いせに反転打ち込んでやる。

果たして、出てきたのはぬえだった。

「えー、ルール説明を行います。」

……あ、夢だわこれ。そう自覚したらなんかあの獏が後ろで

笑ってる気がしてきたもん。絶対夢だ。
「残念だが、妖怪は夢を見ない。君が一番よく知っているだろう？」
うーん、この追い詰めっぷり。後ろから聞こえてきた声がそのまま私を思考の渦に突き落とす。というかいるなら見てないで助けろドレミー。
「嫌だね。私は君が一番嫌いなんだ。君のやった所業、許した覚えはないよ？」
はいはい。どうせお前はそんなやつだろうと思ったよ。肝心な時に助けないからなお前は。私が一番嫌いなタイプだ。
「結構。それよりルールを聞かなくていいのかい？脱出のヒントがあるかもしれないのに。」
黙れ、一番の脱出ポイント。お前がデレたら速攻解決するんだよ。
とは言いつつも、私はルールを聞き始めた。嫌な奴だが言うことは正論なのだ。だから嫌な奴なんだが。
しかしルールは三行で終わった。
幸いにも、何度も繰り返して言っていたので聞き逃しはしなかったが。
一、これはバスケである。籠にボールを入れて最終的に点の高い方が勝ちとなる。
二、妨害行為、及びそれに準ずる工作等は制限しない。好き勝手やるがいい。
そして三、この空間では効かない能力は存在しない。
「……」
「以上をもちまして、開会式を閉会します。この後はチームを作ってもらいます。はい、五人組作ってー」
「おいやめろ」
コート内はその一言で阿鼻叫喚の嵐となった。もっとも私たちがいる場所は放送席もとい特等席。一段高い上に壁とガラスで囲まれているので被弾の危険性はない。そこだけは褒め讃えたい。
「さて、理解したかい？何故こうなったのか。」
ドレミー・スイート。人を夢に誘い、夢を喰い、夢を創る。目の前

にいるのは正真正銘のそのバケモノだ。妖怪である私は夢を見ないので、本来なら知り合う予定などなかった。が、生憎運命は皮肉が大好物である。そう、何故か会った。そしてその時にやらかしたことを今でも恨んでいる。要は私の敵なのだが、案外世話焼きらしく、危害は加えず助言してくる。まるで私の嫌いな聖人タイプだが、性格は私より悪い。だから嫌いになれない。

そんな悪性格のドレミーが、私に手を広げて近づいてくる。手を出すことは出来ないがガラス越しにそれがわかって……あれ？ピンチ？

「……推理はできる。だが説明がつかん。」

「うーん、そうだよね。なんで簀巻きにしたかの説明がつかないよね。」

それはいくらでも思いつくのだが。大方お前が思いつきで巻いたんだろ。

「惜しいね、十割正解だよ」

「それ以上に何があるんだよお前」

「見てればわかるよ。ほら、ちょうどチームも決まったし。」

一体なんの関係があるというのか。だが気になったのでコートを見る。あのメンツだし、誰だって気になるだろう。

コートに並ぶ八チーム。バランスいいな、と思ったら誰か担架で運ばれている。おそらくバランスよくなるように誰かが気を利かしたのだろう。見ると、ピンク髪の女が死にそうな表情をしていた。哀れ亡霊姫。おまえはもう死んでいる。

「一つ一つチームを見るより、試合見た方が早いよ。すぐに始めるしね。」

「ああそうかい。じゃあさっさとしてくれ」

「せっかちだな。短気は損気だよ。」

そう言った獏はいつの間にか隣に座り、ポッキーを食べていた。お前はくつろぎすぎだろ。

「君は本当に足りないな。後に続く激戦を考えてみたまえ。今しかゆっくりできないのだよ」

「簀巻きの妖怪の横でゆっくりしてんじゃねーよ」
「あ、そろそろ始めなきゃ。――皆様、長らくお待たせいたしました。これよりバスケットボール地霊杯を開催します。くじはもう引いたので早くチーム揃ってください。」
「時間なさすぎないか？」
「これくらいが丁度いいよ。ほら、一回戦だ。」
コートに立ち、向かい合う十人の少女。……必要ないと思うが、紹介しておく。まずは右からだな。
手前より、烏烏烏雀白狼。陰謀の匂いを感じる。主に妖怪の山的な。なんか雀は青い顔をしてるし。あれは間違いなく、進んで入ったのではなく脅されて入った顔だ。人数が足りないから数合わせというヤツである。やっぱ山ってクソだわ。そうまでして戦う意味がさっぱりわからないが。
だが、そんな疑問を左のチームが吹き飛ばす。手前より、吸血鬼鬼スキマ紅白天人。なんだあのドリームチーム。チートだろうあんなの。天人が青を通り越して白い顔をして松葉杖をついているが、それを引いてもあまりある戦闘力だ。休ませてやればいいのに。
「さあそれでは、地霊杯記念すべき一戦目を今始めたいと思います。両者向かい合って礼は済ませたと思いますので早速ジャンプボール！」
今まさに礼をしようとした天人の額を撃ち抜いて、地面からボールが打ち出された。グッバイ天人。そして打ち出した穴が閉まった。便利だなあ河童の技術。そしてよく見たら脇には担架隊がスタンバイしている。天人の額狙ったの確信犯だよね、おい。
「さあ、最初のボールを取るのは……おーっと射命丸選手、相手を踏み台にしてボールを取ったぁー！」
真っ先に隙間を開いた腕よりも早く、天狗がボールを取る。ちなみに踏み台にされたのは天人だ。……本気出してないか、あれ。前見た時の三倍は早いよ。
「最初にボールをとった方が流れをつかむからね。射命丸文としてはここで一気に点を取り、カメラを構える暇を作りたいはずだ。」

「お前、まともに実況するのかよ」
「試合も見ない簀巻きは黙っていたまえ。ここは戦場だ。」
獏にたしなめられる。ちょっと屈辱だ。だが私は試合よりも知りたいことがあった。
「なあ、おい。これの優勝時のメリットが全く思いつかないんだが」
「あれ？説明してないの、ドレミーちゃん。」
「知らないものをどうやって説明しろというのかね」
ここにいるくせに実行委員じゃないのかお前。あんなに大物感出しといてそれはないぞ。こっちには知る権利があるのだ。
「しょうがないなあ、教えてあげる。優勝賞品はね――」

「鬼人正邪。あなたの身柄だよ。」

匿え

崩れ落ちそうな空だな、と思った頃には、もう降り出していた。
ぽつ、ぽつという音を皮切りに、静かに降り注ぐ夏の雨。
いつも賑やかなこの森から、雨は他の音を奪っていく。それはまるで森の名と同じ、魔法のようだった。
雨が降るとこの森、魔法の森の瘴気は薄くなる。私とて未だ人間、瘴気に相当慣れたとはいえ、無いほうが楽なのは間違いない。
魔法使いとしてどうなんだとは思うが、今のところ人間をやめるつもりはないのでこれでいいのだ。私は大きく伸びをし息を吸って、浄化された新鮮な空気を肺いっぱいに送り込んだ。
――ふう。さて、何をするかな……
そんな思考を巡らせようとすると、店側の戸が叩かれる音三つ。
はいはーい、と返事をして玄関に向かいながら、違和感を感じた。
今、外は雨。周りは魔法の森。そしてここは我が家、霧雨魔法店だ。
店とついてはいるものの、客が来たことは数える程度しかない。そして大体私は研究しているか遊びに行ってるか採集してるかなので、客の悩みを解決できたのはほんの一部だけだ。人間にも妖怪にも、店の評判はお世辞にもいいとは言えないはずである。
そんなところを、雨の日に態々訪ねてくるだって？　一体どんな物好きなんだ。あるいはどんな厄介者なのか。この霧雨魔理沙様の眼鏡にかなう奴だったらいいのだが。
「どっちらっさまーっと」
玄関のドアを開く。
「匿え」
「……」
そこにいたのは、見知った妖怪だった。
身長は私と同じくらい。真っ黒で感情を見通せない目。黒と白に前髪だけが赤という幻想郷でも珍しい髪に、小さく二本の角が見える。襟やスカート部分に矢印があしらわれたワンピースを腰で留めて、胸元には逆さになった小さなリボンをつけている。そしてその全

てが雨に蹂躙されていた。
知らないはずがない。
逃亡者、鬼人正邪。幻想郷きってのお尋ね者だ。
「匿え」
「えー……。」
どうやら、厄介というか、厄がそのままやって来たようで。

朝から空を半分近くも支配していた入道雲は、昼を経てついに雨雲へと変わった。
稲光を伴った夕立が、木に、草に、人々に水の恵みを与える。ここ八日ほどずっと晴れだったから、喜びもひとしおというものだろう。
しかし、普通の魔法使いたる私の顔を晴らすには、どうにも足りない。
「漢方薬でも入ってるのか、この茶」
喜びを憂いに変えた張本人は、私の貸した服を着てソファに座り、温かいお茶を片手にタオルで頭を拭いていた。
彼女の名は鬼人正邪。とある異変にて私が出会った、ただの天邪鬼だ。
会った時から私を気に入っていたらしく、時折こうやって私の家に来る。最初は私も敬遠していたのだが、話してみると意外と面白いやつだった。
口は悪いが努力家で、野心が大きく、諦めが悪い。他ならいざ知らず、私と気が合わないわけがなかった。今となっては大事な友人の一人だ。
「特製ハーブティーだ。苦味が体に優しいらしい」
「おい、らしいって何だ」
「お前も実験体だって意味だ」
注意深く香りをかぐ正邪の前で、私もお茶を入れて一杯飲み干す。こうしないと飲まないというのだから、こいつも大変な生き方をしてるとつくづく思う。

……苦っ。
「そんな苦い顔するもん、人に出すなよ」
「渋い顔だぜ。玄関で出迎えた時と同じ」
「その時はもっと苦虫を噛み殺したような顔してたぞ」
「それ解ってて入ろうとするか、普通」
「追い出そうとしない奴が悪い」
正邪がお茶を飲む。私と違って彼女は、眉を僅かに顰めた程度だった。
何か負けた気分だな。次は妖怪だけ苦味を感じるキノコとか入れてみるか。こいつはマゾではないが、優しくしたり歓迎したりすると嫌がるとかいう訳の分からん体質だからな。それくらいはコミュニケーションの一種として済ませるだろう。
多分。
「んで？　雨だからって、ただ雨宿りに来たわけじゃないよな、お前は」
「おいおい、つれないこと言うなよ。折角『親友』が来たんだ、もう少し意味なく話してもいいだろう」
「ああそうだな、『親友』だな。だから厳しく言うんだぜ」
「くくっ。やっぱお前が一番大嫌いだよ」
「奇遇だな、私もだ。お前を助けて世界が救えるなら、お前も世界も滅ぼすルートを探るぜ」
「お優しいねえ。ま、友人を反逆者にするわけにはいかないな。用件を言おうじゃないか」
正邪はタオルを頭に巻き、椅子に座り直して、改めて口を開いた。
「お前、紫に勝てるか？」
「っあーー、なんで想定からさらに上の厄介持ち込むんだお前はさあ」
「常に上を行くのが人類史の発展だろう？」
「妖怪がそれを言うのかよ。で、だ。この際どうやって逃げ切ったかは訊かないからさ、教えてくれ。なんで今さら追われてるんだ？」
彼女はお尋ね者だ。ただし正確に言うなら、お尋ね者だった。
ほんの最近、天邪鬼が吸血鬼の下についたという噂が流れた。吸血

鬼は妖怪の中でも恐れられる存在だ。幻想郷最後の戦争である吸血鬼異変、そしてスペルカードルールの初披露となった紅霧異変。この二つの異変を知っていれば、吸血鬼の傘下に入った天邪鬼を狙うものはいないだろう。

実際は下どころか対等で、しかも一緒に依頼業をしているのだけれども。

さらには同じく吸血鬼と懇意にしている鵺なる妖怪が、いまだに彼女の命を狙っているらしいけれども。

まあ、それは知ったことじゃない。いずれ当人同士で解決するだろう。重要なのは、そもそも彼女が狙われる理由がないことだ。

下からは吸血鬼がいるから勝てず。

上からは吸血鬼にへそを曲げられるから挑まない。

だから対等の鵺はやりあえるのだろうが、紫はどう見ても上側の妖怪だ。しかも幻想郷の管理者であり、吸血鬼にへそを曲げられると最も困る妖怪の一人のはずである。

言うなれば首相がヤクザの子分に手を出すようなもの。何をしているんだ、奴は。

「さあね。私は誰彼構わず喧嘩売ってんだ、どれが奴の琴線に触れたかなんてわかるかよ」

「まだ天邪鬼やってんの、お前」

「当たり前だろう？　私が反逆やめるとか言い出した日は、私の命日になるぞ」

「ご立派な信念だことで」

「っは、いい皮肉だ。それで？　勝てるのか？」

「……」

ほんの少し、考える。

私は強くなった。霊夢との勝率はいまだ3：7ではあるものの、手を抜かれたうえで負けることは少なくなってきている。下してきた妖怪の数も、霊夢や妖夢、早苗に引けを取らない。一応だが何度か紫に挑んで勝ったこともあるのだ。再び紫に戦いを挑んでも、勝ち目の見えない戦いになることはないだろう。

でも、それ以前に問題がある。
「勝率は０だな」
「……そりゃ０回戦えば０回しか勝てねえよ」

棘生える

体から棘が生えた。

たったそれだけの情報から、私はどれだけの物語を想像し、また幾億の人びとがそれを読み語り受け継いでいくだろうか？　それを知ることに関して私は興味を持つものの、明日を今まさに手放した私にとっては取るに足らない道端の砂利に等しい輝きを放っている。そもそも未だ単なる記憶であるこの思いを誰かに伝えることなど不可能に違いない。だがしかし、記憶として残せるということは誰かがいつか考えた、あるいはいつか考えつくという事実に対した証明の証左に他ならない。これは私が普通の存在であるという考えに基づくのではなく、人の考え得るものすべて取りうる可能性に等しいといういつかどこかで自分に取り入れた考え方にその根拠を頼る。したがって、私は末期の末期だとしても無駄へ変換することのできない思考に囚われ続けることを選ぶのだ。

そも、この棘とはいかなるものか。実際、これを棘と形容するのは少しばかり語弊が生じるかもしれない。私の胸を貫き天を仰いでいるこの棘は、私の体に心臓はおろか肺臓一つを完璧に穿ち抜くほどの大穴を開けているのである。引き抜いてくれれば風も通るだろうに、この有様では蛆も何から食めばいいものか迷いを生じることがあるかもしれない。それならば私は鳥のみにこの身を捧げようではないか。肉を取りやすくするために力を抜き、目を取りやすくするために大きく見開く。けして自然に動物が迷い込むことのないこの密室においても、私が取りうる行動とその原理は野生に頼るより他になかった。そうでなければ、この部屋を霊安室と変える私の蛮行を認めてもらっているという自覚さえもなければ、私の身体の死後について死後も苦慮せねばならないこの結末に私は苦しむことすらできないのだ。

やがて私の首に、重く固く大きく研ぎ澄まされた刃が迫る。

辛く、苦く、静かで、暗く。そんな善意で舗装された安らぎへと至る道を言葉で蹂躙し、死への実感を強欲に撃墜する。私という存在が消えるその瞬間に思い至ったのは、終に私は許されたという安堵と形

ばかりの後悔だ。それらの隙間に入り込んだ怨嗟と憤怒の感情が、幾重にも折り重なり私の存在をここに繋ぎ留めている。死んだ瞬間に誰もが手に入れるのは死んだという事実だけだから、私が手にしたこの解放感は私だけの真実であるのだと心に刻み込み私は明日も生きていく。

ああ、そうだ。私は明日も生きていく。

生きていく。

生きて。
いくのに。
この棘。

邪魔だな。

「火符『アグニシャイン』」

私ごと焼けた。おかげで胸の傷口から出血することなく回復魔法を唱えられたからプラスね。そもそも胸を刺された時点でプラスだけども。いくら回復魔法を使えば元通りとはいえ、もしも子宮とか

ぶっ刺されたりしたら私もそれなりに怒る。なんか、こう、貫通済みとか言われそうでやだ。

というか、種族魔法使いって心臓無くなっても即死しないのね。初めて知ったわ。多分科学的に血液で生きているっていう状態より、妖怪的に体が動くから生きているっていう状態のほうが優勢なんだろう。そう考えたらなんか無敵な気がしてくるが、あまりはしゃぐとまたフランに怒られるから程々にしないと。

さぁあぁあぁて。

絶対的破壊理論、４９４年の禁

そう、相対的なのだ。何もかもが。
私の常識は、お父様の常識じゃない。
私の知識は、お母様の知識じゃない。
私の認識は、お姉様の認識じゃない。
この世に絶対がそもそも存在しないと気づいたのは、私が生まれてちょうど二ヶ月経った頃だった。
そしてその日は、私の忘れられない日となった。

吸血鬼は元々知能という点でかなり上にいる種族だが、私はそこからさらに外れていたそうだ。
生まれて二日目で言葉を発し、五日目で羽根もないのに空を飛び、二週間も経てば従者たちと対等に戦っていた。その有り余る成長速度は、両親ですら少し恐れを抱いたらしい。姉はただただ喜んでいたが。
二十日目になって、私は本を読み始めた。
紅魔館の誇る大図書館。そこには、その頃にはすでに、吸血鬼の一生をかけても読み切れないであろう大量の書物があった。
同年代の友人がいない――友人ではなく同年代がいなかったのだ――ゆえに暇を持て余していた私が、従者全員でも整理が追いつかず、積まれたままになっていた本たちと友達になるのはそうかからなかった。
三十五日目、私は八つの本の塔を読み終えた。
図書館の本には、魔本もたくさんあった。
魔本とは、ただ魔法が書いてあるだけの本ではない。読む者から血を吸い取り字に変えるもの、生者には決して見えないもの、知恵が無ければ開くことすら叶わないものだってある。
なかには、開いた瞬間、死に至る呪いを撒き散らすものすらもあった。けれどどんな魔本も、私に読めないものはなかった。
簡単だ。力試しもトラップも、みんな壊してしまえばいい。

それは魔法使いにとっての敗北であり、悪だということには、結局パチュリーが来るまで気付かなかった。

四十二日目。私はある一つの塔を見つけた。

その塔にある本はどれも面白くて、私はこの日、初めて夜ふかし（吸血鬼だから昼ふかしというのか）をした。

孔子。ソクラテス。シッダルタ。魔本はどれも似たりよったりの事ばかり書いている、と少し飽きが来た頃だったから、考え方に比重を置いたこの本たちはすごく新鮮だった。夜が過ぎ朝が来て昼になって、夕日が私の翼を焦がしても、私は読むことをやめなかったのだ。

後になって、その塔を見つけたのは姉の『自分と遊んでくれない妹』に対するイタズラだったと知った。つまらない本しか読めない運命に妹を引き込めば、自分のもとに帰ってくるだろう。そう考えたらしい。

けれど予想に反して、私はその本をも楽しんだ。それが姉は許せなかったのだろう。その日初めて姉妹喧嘩をした。本来は結局得をしている私にその喧嘩を買う理由なんてなかったのだが、当時の私は行動を制限されていたという事実や、何より自分が好きになった本をつまらないと一蹴されたのが我慢ならなかったのだ。目先の怒りに飛びつき、口論からやがて取っ組み合いになり、そして紅魔館の一室が吹き飛んだ。

普段寛大な父もこれは静観せず、私達二人を等しく叱った。けれど私達は口先だけで謝り、仲直りの握手で互いに手を潰し合ったのを覚えている。もちろん父から更に叱られたのは言うまでもない。あの時の父と、その後ろにいた母の形相は、今でも時折夢に見る。

今でもこのことを思い出すと、ほんの少し姉にむかっ腹が立つのだが――思えば、私は姉に感謝すべきなのだろう。とにかくまずは本棚に入れようと、ジャンルではなく全てアルファベット順でソートしていた紅魔の大図書館で、『哲学』を集めた本の塔に触れられたのはあれが最初で最後だった。もしあれらを読まなければ、今ごろ私はとっくに狂気に飲まれていただろうし。その運命に、というと姉が調子に乗

るから言いたくないが、ともかく感謝しなければならない。良かったのか悪かったのかはわからないけど。

それに、手加減無しの本気でぶつかり合えたのも、その日が最後だったから。

四十四日目。いつものように図書館に入ると、どこからか一冊の本が落ちてきた。

それ自体は珍しくもない。整理に明け暮れる従者たちがつい魔本の効果を発動させ、一帯全てと共に転移されることなどよくある話だった。

そのたびに読むついでに配置を覚えていた私が、従者に気づかれる前に本をこっそり戻したりしたものだ。けれどこの日は、本を戻すことはなかった。

『付記』

本の表紙にはただ一言、そう書かれていた。

四十五日目。私はどうにかこうにか、その本を読み終えた。

その頃には一日で本棚一段分の本を読めるようになっていた私が、こんなに時間がかかった理由は一つ。トラップを壊し続けていたからだ。

透明化、意識誘導、自動文字削除、火焔、雷撃、衝撃、五感異常、筋弛緩、記憶処理、即死の呪い。開けば開いた分だけ出てくるトラップ魔法の数々。太陽の光が出始めた時は流石に死ぬかと思った。それでも私は諦めず、好奇心を杖に、力を盾に。ページを一枚、一枚とめくり続け、ついに読み終えたのだ。

なのにそれほどまでに苦労して読んだ内容は、全くの白紙だった。

当然だ。それこそがこの本の目的なのだから。

つまるところ、この本は恐ろしく悪質な、ただのいたずら本だった。意味深なタイトルで惹きつけ、ありとあらゆるトラップを配置し、思わせぶりに振る舞っておいて何もない。私の上に落ちてきたのも、本の最後にあった「魔力持ちを選んで定期的に転移する魔法」によるものに過ぎない。なまじ魔法を身につけたりしているとますますハマ

りやすい、ある意味トラップそのものの本だったのだ。
まんまと引っかかった私は、怒りのままに本を破壊しようと手を握る――寸前に、あることに気づいた。
そして私は庭へ向かった。
庭の木々を全て薙ぎ倒し、地を抉り、雲を穿ち。私は確信した。
強くなっていたのだ。トラップに使い続けていた、破壊の力が。
その力について、誰かに相談したことはなかった。あらゆるものを否定し、消滅させ、破壊する絶対の力。

そうだ。
基準がないなら、指標がないなら、相対の反対が無いのなら。
私が絶対になればいい。
私は信じていたのだ。きっと私の不安はみんなも持っている。だから私が絶対を作れば、みんなは安心するのだと。これはみんなの為だと。
そんな子供じみた夢を、
私は、
私の力は、
叶えてしまった。